

うめ が しま
梅 ケ 島 遺 跡
おお つじ や しき
大 辻 屋 敷 遺 跡

—東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

2001年

宮崎県埋蔵文化財センター

梅ヶ島遺跡・大辻屋敷遺跡-東九州自動車道（西部～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-

誤	→	正
挿図目次		
第 21 包含層出土実測図	→	第 21 包含層出土実測図
..... 56 55
第 22 包含層出土実測図	→	第 22 包含層出土実測図
..... 57 56
第 23 包含層出土実測図	→	第 23 包含層出土実測図
..... 58 57
第 24 包含層出土実測図	→	第 24 包含層出土実測図
..... 59 58
第 25 包含層出土実測図	→	第 25 包含層出土実測図
..... 58 59
P.18		
第 4 節 自然化学分析調査の結果 → 第 4 節 自然科学分析調査の結果		

序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解を頂き厚く御礼を申し上げます。

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道西都～清武間建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成7年度から平成10年度にかけて実施してまいりました。本書は、その調査報告書であります。

梅ヶ島遺跡では、古代から中世にかけての水田遺構、近世以後の杭列が検出されました。大辻屋敷遺跡では、古代から中世にかけての須恵器片を中心とする土器集中箇所が検出されました。

これらの遺構・遺物は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料です。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心から謝意を表します。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛

例　　言

- 1 本書は東九州自動車道建設（西都～清武間）に伴う事前調査として宮崎県教育委員会が実施した梅ヶ島遺跡、大辻屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団九州支社の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、平成9、10年度に宮崎県埋蔵文化財センターが行った。
- 3 現地調査における実測図及び写真撮影は梅ヶ島遺跡については小山博が行い、大辻屋敷遺跡については福松東一が行った。ただし、空中写真撮影については株式会社スカイサーベイに委託した。
- 4 梅ヶ島遺跡での自然科学分析を株式会社古環境研究所に、土壌調査を綾町有機農業開発センターに依頼して実施した。
- 5 遺物・図面の整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面作成、実測、トレースは主に小山、福松ほか整理補助員の協力を得て行った。
- 6 本書で使用した位置図及び周辺地形図は、国土地理院発行の5万分の1の図を利用した。
- 7 遺物の写真は小山・福松が撮影した。
- 8 土層断面及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の「新版 標準土色帖」に準拠した。
- 9 本書で使用した方位は、全体図が座標北（G. N.）、個別遺構図は磁北（M. N.）である。座標は国土座標第II系に換算。レベルは海拔絶対高である。
- 10 本書で使用した遺構略記号は次の通りである。

S E . . . 溝状遺構	S Z . . . 不明遺構
----------------	----------------
- 11 本書の執筆は梅ヶ島遺跡を小山が、大辻屋敷遺跡を福松が行い、編集を福松が行った。
- 12 出土遺物・その他諸記録については宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 梅ヶ島遺跡	2
第2節 大辻屋敷遺跡	3

第Ⅲ章 梅ヶ島遺跡

第1節 調査の経過と概要	5
第2節 遺跡の基本層序	6
第3節 調査の記録	6

1 A区の調査

(1) 層序	6
(2) 調査の概要	9
(3) 造構	9
(4) 遺物	11

2 B区の調査

(1) 層序	16
(2) 調査の概要	16
(3) 造構	16
(4) 遺物	16

第4節 自然科学分析調査の結果	18
-----------------	----

第5節 梅ヶ島遺跡土壌調査	40
---------------	----

第6節 まとめ	42
---------	----

第Ⅳ章 大辻屋敷遺跡

第1節 調査の概要	47
-----------	----

第2節 遺跡の基本層序	47
-------------	----

第3節 調査の記録	
-----------	--

1 造構	49
------	----

2 包含層出土遺物	51
-----------	----

第4節 まとめ	62
---------	----

挿図目次

第三章 梅ヶ島遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	4
第2図 梅ヶ島遺跡周辺地形図	5
第3図 A区土層断面図	8
第4図 A区北側(外周排水溝)壁面土層断面図	8
第5図 A区西側(外周排水溝)壁面土層断面図	8
第6図 A区平面図	10
第7図 A区遺構検出状況	12
第8図 A区出土遺物	13
第9図 B区土層断面図	14
第10図 B区平面図	14
第11図 B区遺構検出状況	15
第12図 B区出土遺物	16

第四章 大辻屋敷遺跡

第13図 基本土層柱状図	47
第14図 周辺地形図	48
第15図 IV a層遺構分布図	50
第16図 土器集中箇所接合状況図	50
第17図 畫状遺構実測図	51
第18図 SZ 1 実測図	51
第19図 SE 1 実測図	51
第20図 包含層出土遺物実測図	53
第21図 包含層出土遺物実測図	56
第22図 包含層出土遺物実測図	57
第23図 包含層出土遺物実測図	58
第24図 包含層出土遺物実測図	59
第25図 包含層出土遺物実測図	58

表目次

第1表 梅ヶ島遺跡出土遺物観察表	17	第3表 大辻屋敷遺跡出土土錐計測表	62
第2表 大辻屋敷遺跡出土土器観察表	60		

図版目次

図版1～3 梅ヶ島遺跡	44～46
図版4～8 大辻屋敷遺跡	64～68

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎県教育委員会では、平成7年度から日本道路公団の委託を受け、東九州自動車道（西都～清武間）の建設工事に伴い、遺跡の発掘調査を実施した。平成7年度に清武工事区から7遺跡に着手し、平成9年度に15遺跡、平成10年度に前年度継続2遺跡を含め3遺跡を調査している。

本遺跡である梅ヶ島遺跡・大辻屋敷遺跡は、それぞれ佐土原町の北西部に広がる水田地帯と西都市南東部の三財川と一つ瀬川の合流地付近にある。

梅ヶ島遺跡は平成8年に2回の確認調査の結果、約2m下の黒褐色層よりブラントオパールを約2,000個／g検出ため、約1,072m²を平成9年8月1日～平成9年12月15日まで発掘調査を実施した。

大辻屋敷遺跡は確認調査の結果、調査対象地の北側で須恵器片、土師器片数点と、焼土面を確認したため、現地の家屋移転状況に合わせて、平成10年9月16日～平成10年11月24日と平成11年2月8日～平成11年2月22日の二次にわたって計700m²の調査を実施した。

第2節 調査の組織

調査の組織は次の通りで、調査主体は宮崎県埋蔵文化財センターである。

梅ヶ島遺跡

平成9年度：発掘調査

所長	藤本 健一	所長	田中 守
副所長	岩永 哲夫	庶務係長	児玉 和昭
庶務係長	三石 泰博	調査第一係長	面高 哲郎
調査第一係長	面高 哲郎	主任主事 調査担当	福松 東一
主事 調査担当	小山 博	主事	橋本 英俊
主事	橋本 英俊		

大辻屋敷遺跡

平成10年度：発掘調査

平成11年度：整理作業

所長	田中 守	所長	矢野 剛
副所長	江口 京子	副所長	菊池 茂仁
庶務係長	児玉 和昭	副所長兼調査第二課長	岩永 哲夫
調査第一係長	面高 哲郎	総務係長	亀井 雄子
主任主事 調査担当	福松 東一	調査第一課長兼第一係長	面高 哲郎
主任主事 調査担当	小山 博	第二係長	長津 宗重
		主任主事 調査担当	福松 東一
		主任主事 調査担当	小山 博

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

梅ヶ島遺跡、大辻屋敷遺跡は、古代から中世の遺跡である。前者は、宮崎郡佐土原町西上那珂字梅ヶ島に、後者は、西都市大字黒生野字大辻屋敷に所在する。地理的に4.5kmの距離があり、位置と環境について述べることが困難であるため、遺跡別に記述する。

第1節 梅ヶ島遺跡

梅ヶ島遺跡は、宮崎郡佐土原町西上那珂字梅ヶ島に所在する。西都市と国富町との境に接しており、北東部には旧石器時代の遺跡である船野遺跡が所在する船野台地が広がる。遺跡は台地に挟まれた谷間に広がる水田地帯に位置し、調査時点では水田として利用されていた。東部の微高地に人家が密集しており、昭和58年に大規模なほ場整備が行われた。南西部の丘陵部の縁に新宮川が流れしており、ほ場整備後に現在の位置を流れるようになった。それ以前は、低地のほぼ中央部を流れ、湿地が多く河川の氾濫もたびたび起きていたとのことである。

梅ヶ島遺跡の所在する佐土原町西上那珂は、古代律令制下の国郡制のもとで那珂郡に属し、中世では那珂郷に含まれていたと考えられる。近世において上那珂村に属していたが、明治3年（1870）に東上那珂村と西上那珂村に分村した。西上那珂には西上那珂神社があるが由緒は不詳。また、真言宗平等寺があったが、明治4年に廃寺となる（『日向地誌』）。安政5年（1858）の佐土原藩寺院本末開山調写によると、開山は建久2年（1191）、黒貴寺（現西都市）末で、觀音領一一石余を格護とある⁽¹⁾。

古代の那珂郡について詳細は分からぬが、古代末から中世にかけての那珂郡について簡単にまとめていきたい。平安時代末期、那珂郡には豊前宇佐宮領那珂庄と八条女院領国富庄があった。宇佐大鏡によれば、「那珂庄」は永保3年（1083）国司多治真人助成のとき封民三八人の代として那珂郡の郡家院を宇佐宮に寄進して開発したものであり、のちに広原庄と呼ばれるようになった可能性が考えられている⁽²⁾。八条女院領とは鳥羽天皇の第三皇女八条院障子の所領をいう。八条女院領国富庄は安元2年（1176）2月日の八条院目録に「日向国富」とみえ、当時既に八条院の所領であった。『建久図田帳』によれば国富庄那珂は田数として200町とみえ、地頭は土持太郎信綱（宣綱）であった。南北朝期を経て、那珂は伊東氏の一族である田島氏に与えられたと伝えられている（『日向記』）⁽³⁾。

（註）

- (1) 『宮崎県の地名』 平凡社 1997年
- (2) 同 上
- (3) 同 上

第2節 大辻屋敷遺跡

大辻屋敷遺跡は、西都市大字黒生野字大辻屋敷に所在する。

西都市は九州山地を源流とする一つ瀬川の中流域に位置する。一つ瀬川とその支流の三財川と三納川沿いに広がる沖積地が水田化し、九州山地から幾重にも延びた洪積台地が広がる。

本遺跡は、西都市市街地の東端を南流する一つ瀬川とその2つの支流とがそれぞれ形成する沖積地に位置し、西都市と佐土原町、新富町の複雑に入りこんだ境に立地する。調査地の周辺は水田地帯を形成し、標高約8m内外の低地である。堤防などによる流路制御が完全でなかった往事は、洪水のたびに流路が変化したところであり、1市2町の境が複雑になっているのもこの亂流の名残である。

本遺跡周辺は、一つ瀬川左岸、標高約70mに新田原台地があり、その最西端に約200余基を有する新田原古墳群が広がる。対岸である一つ瀬川右岸の台地に、西都原古墳群が立地している。本遺跡の北西約3.5kmには、南北朝時代の初頭、伊豆國から下向して日向一円を制した伊藤氏の本拠地である都於郡城跡がある。この城は、標高約100mを有し、北方・西方が急崖となって水田につながっている。裾部に三財川が流れ、外堀的な役割を果たしている。また、南西には飛鳥時代の横穴墓や中世墓を検出した平田追遺跡や国指定の巨田神社、南には東上那珂の丘陵に奈良時代から平安時代にかけての須恵器や瓦が出土した窯の下村窯跡群がある。

本遺跡周辺の字名には、大辻屋敷の他、堀内屋敷、高屋敷、高圓屋敷、大黒屋敷、花下屋敷と多くの屋敷地名が残っており、遺跡との関連があるものと考えられたが、近世以降現代までの擾乱が著しいため、明確な関連は見いだせていない。本遺跡の立地する黒生野周辺は近世期に、黒生野村の南東に現王島村、北に岡富村、西に鹿野田村が所在していた。三財川は一つ瀬川と同様、内陸部の重要な物産輸送路であり、「日向地誌」に日本形船15（50石未満運船14・渡船1）とみえるように岡富村と同様に黒生野村にも多くの運船があった。当村の南に曹洞宗東泉寺があり、天文9年（1540年）義芳光訓の開山で（寺蔵由緒書）、本尊は釈迦如来と聖觀音である^①。

参考文献

「西都市埋蔵文化財発掘調査報告書」第5集 西都市教育委員会 1988
「佐土原町文化財調査報告書10集」 佐土原町教育委員会 1996

（註）

（1）「宮崎県の地名」 平凡社 1997



- | | | | |
|-------------|-------------|--------------|--------------|
| 1. 梅ヶ島遺跡 | 2. 大辻屋敷遺跡 | 3. 平田追遺跡 | 4. 別府原・西ヶ迫遺跡 |
| 5. 上ノ原遺跡 | 6. 下屋敷遺跡 | 7. 都於郡城址 | 8. 久保土遺跡 |
| 9. 堂ヶ迫遺跡 | 10. 叶迫遺跡 | 11. 下村塙跡群 | 12. 八幡上遺跡 |
| 13. 銀代ヶ迫遺跡 | 14. 犬園原地区遺跡 | 15. 花園地下式横穴墓 | 16. 寺山遺跡 |
| 17. 清水西原古墳群 | 18. 西都原古墳群 | 19. 松本塙古墳 | 20. 松本原遺跡 |

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡（1:50,000）

第Ⅲ章 梅ヶ島遺跡

第1節 調査の経過と概要（第2図）

調査対象地は、町道上浦下線と新宮川に挟まれた水田地帯である。低地の水田であるため出水の影響を受けやすいことから、調査は梅雨明けを待って行なった。調査期間は、平成9年8月1日から同年12月15日までの4.5ヵ月間であり、調査対象面積は7,270m²である。

調査を進めるにおいて、平成8年度に行われた2度の試掘調査の結果をもとにして調査区を2カ所に絞って設定した。試掘調査は平成8年の5月と10月の2回にわたって行われ、合計14カ所にトレンチを入れた。5月の試掘調査で南西部側のトレンチと北東部側のトレンチの黒褐色層から少量ではあるがプラントオパールが検出された。また10月の試掘調査では、プラントオパールの検出された黒褐色土層の範囲の確認を行った。また調査対象地のはば中央にあたる場所から、旧新宮川と思われる河川跡を確認した。以上のことにより、調査対象地を南西部と北東部の2カ所に絞り調査を行うことにした。便宜上、南西部の調査区をA区、北東部の調査区をB区とする。



第2図 梅ヶ島遺跡周辺地形図（1/3,000）

第2節 遺跡の基本層序

調査区は台地に挟まれた低地に広がる水田地帯であり、繰り返し水田として利用されてきたと考えられる。昭和58年のは場整備による影響や台地からの土砂の流れ込み、河川の氾濫による土砂の堆積などの影響が考えられるが、層序は基本的には粘土層の堆積と考えられる。表土はは場整備による影響を受けているが、ほぼ水平に粘土層が堆積している。A区では黒褐色土層の上層である灰色粘土層からバミスの混入が確認された。またB区では、黒褐色土層の上層で高原スコリアと思われるテフラの混入を確認した。しかし、地形的なことから台地からの流れ込みの可能性が強く、年代を確定する要因とはなりにくい。最下層では青灰・緑灰・灰色の粘土層が見られ弱グライ層からグライ層を示し、またジビリルジル液による反応がみられることから湿潤状態であることを示した。プラント・オパール分析では、黒褐色層から密度が2,000~3,000個／gと比較的低い値であるがイネのプラント・オパールが検出された。

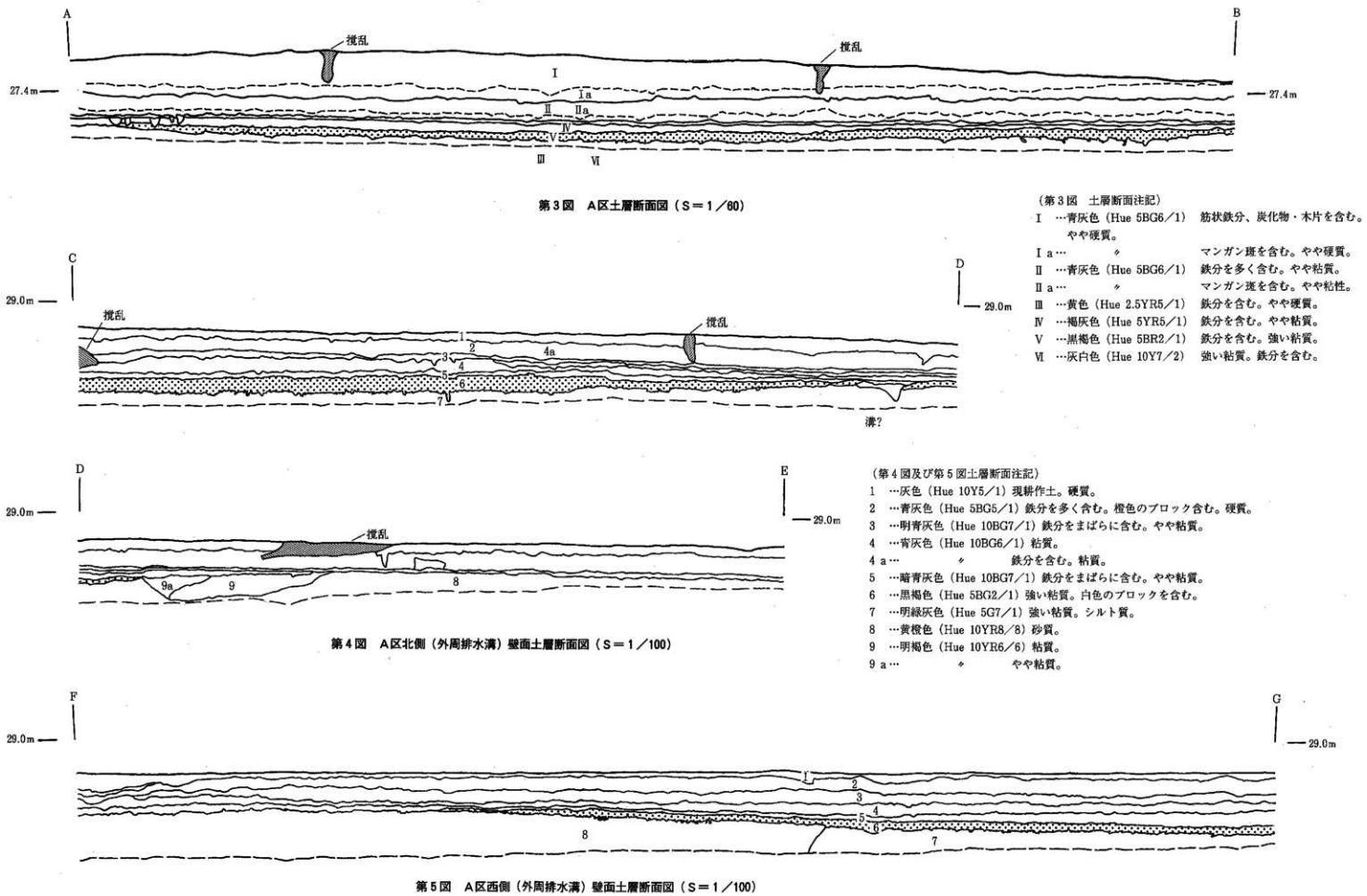
第3節 調査の記録

1 A区の調査

(1) 層序 (第3図~第5図)

A区には、近くに新宮川が流れしており、河川の改修がされる以前は常に氾濫していたということから、河川の氾濫による土砂の堆積の影響が考えられる。第3図は、調査区の南端の土層断面である。現地表面(海拔28m)から地表下約5mまでを7層に区分した。灰色の粘土層(第I層)は現水田耕作面であり、昭和58年のは場整備の影響を受けている水田面と思われる。表土はぎによって表土(第I層)は掘り下げられているが、直下の青灰色の粘土層(第II層)から褐灰色の粘土層(第V層)には、酸化鉄斑と酸化マンガン斑の混入がみられ、斑紋が多量に集積する層と少量に集積する層との繰り返しの状況がみられる。第II層と直下の青灰色の粘土層(第III層)には文明軽石が少量混入しており、糸状斑と点状斑が上下に集積し明瞭に分かれ。このような層位は、田植えの行われている乾田の土層によくみられるものである。

第4図は北側の外周排水溝、第5図は西側の外周排水溝の土層断面図である。第I層は、現耕作面である。第I層から第V層まではほぼ水平に粘土層が堆積している。第VI層は、南から北にかけて原地形の影響によりやや傾斜して堆積している。第I層から第VI層は粘土質であり、耕作痕である巻き上げ(搅拌)が各層に観察される。特に第VI層の巻き上げは明瞭である。また第II層・第III層・第V層は鉄分を含んでいる。第VII層はシルト質であり、地下水の影響を常に受けている。第VI層は旧地形の傾きによって北に向かって下がっている。第4図の第IX層は粘質の強い粘土層である。一部土器片が出土している。第VI層は東側にいくほど薄くなりついにはみられなくなる。また直下層が同じように東側に行くと第VII層のグライ層から第VIII層の砂質層に変わる。第IX層が粘質の強い層であることや、旧新宮川が調査地のほぼ中央部を流れていたということから東端部は旧新宮川の河川の跡であると考えられる。また第5図では、第VI層が南側にいくほど徐々に薄くなり南端では全くみられなくなる。また南側に行くと第VII層から砂質の第VIII層に変わる。第VI層は南から北に向



かって傾斜して堆積していることから、南側は微高地になっていると考えられ、旧地形は、南東から北西に向かって傾斜する微高地に囲まれた窪地であったと考えられる。自然堤防の後背地の湿潤地であったとも推定される。

プラント・オパール分析では、第VI層からは2,300個／gと微量であるがプラント・オパールが検出された。また、その直上の第V層からもイネのプラント・オパールが微量ながら検出された。以上のことから、調査では調査対象層を第VI層とした。

(2) 調査の概要

A区は、調査対象区の南西部で、新宮川に近い水田地帯に位置する(第2図)。排水と土層観察のための外周排水溝を重機で掘った。さらに調査対象層の確認のため壁面の土層のプラント・オパール分析を行った。分析の結果、黒褐色土層の第VI層で約1,000～2,000個／g前後のプラント・オパールが検出された。土層の断面観察では、畦畔状の高まりなどの確認が難しかったので、調査では面的に掘り下げながら精査を行った。第IV層までを除去し、第V層から精査を行った。調査においては、A区をさらに6区画の小区画に分け精査を行った。日差しの関係で土層の色が分かりにくく、掘り下げる高さが一定でないなどの問題が起こり作業は困難なものであった。4区のVI層上層で2本の筋状のにじみを検出した。その後、1～4区でも同じような筋状のにじみを数本検出した。しかし、区画によって精査した層の高さが一定ではなく、また土の色が非常に分かりにくく数条の筋状のにじみを検出するのにとどまった。さらに台風などの影響で調査区が水没することが度々起こり、排水に時間がかかったり、ベルトが崩れるなど作業は困難であった。また、検出した筋状のにじみにトレントを入れて土層の観察を行ったが、畦畔の高まりは確認できなかった。また、明瞭な水田の区画になるような遺構の検出はできなかった。調査は畦畔状の遺構の検出と掘り下げをもって終了した。

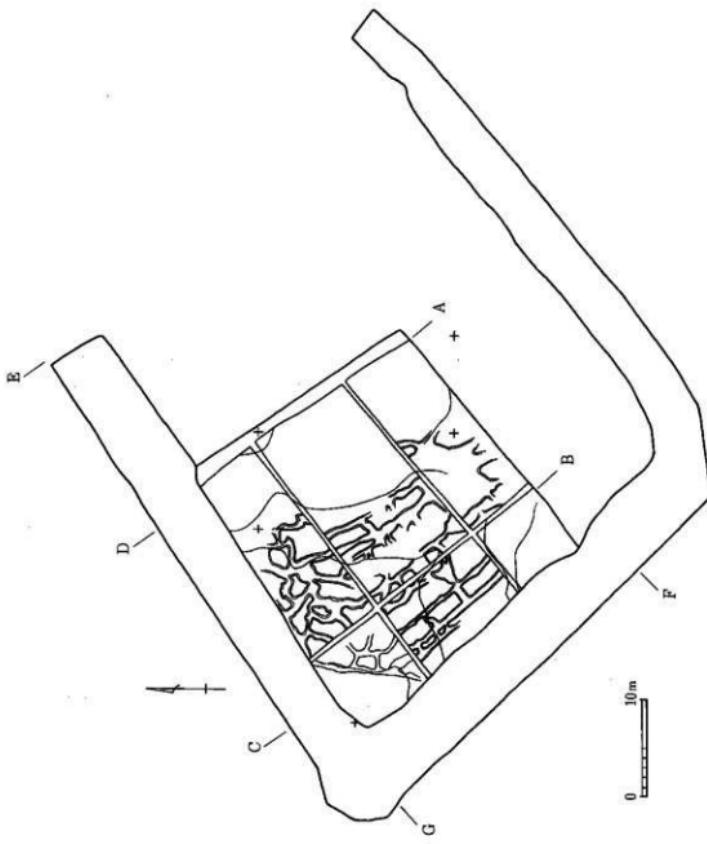
(3) 遺構(第6～7図)

第VI層で畦畔状の遺構を確認した。畦畔状の遺構には杭や敷き込み材での補強はみられない。畦畔状の遺構は盛り土で形成されていたと考えられる。

畦畔状の遺構を検出した第VI層は、調査区の北西部にむかってやや傾斜しており、上層の第V層にはほぼ全域で被覆されている。第VI層の直下に接するのは、粘性の強いグライ層の第VII層であるが一部分砂質の第VIII層に接する。第VI層と第VII層は明瞭な境界をつくり耕作痕である巻き上げも明瞭である。北側土層断面において第VI層は東部から西部に向かって傾斜しており、層の厚さも次第に厚くなっている。最大で15cmである。コンターラインも南東から北西に向かって傾斜している。このことから、原地形は南東から北西に向かってやや傾斜していると推定された。

最初に検出した4区の畦畔状の遺構は、サブトレントを入れ断面観察を行なったが、畦畔の高まりは確認することができなかった。調査では第V層を平面的に掘り下げ、最終的に畦畔状の遺構を数本確認したが、明確な区画となるような遺構は1枚のみで他は検出できなかった。3・4区の畦

第6図 A区平面図



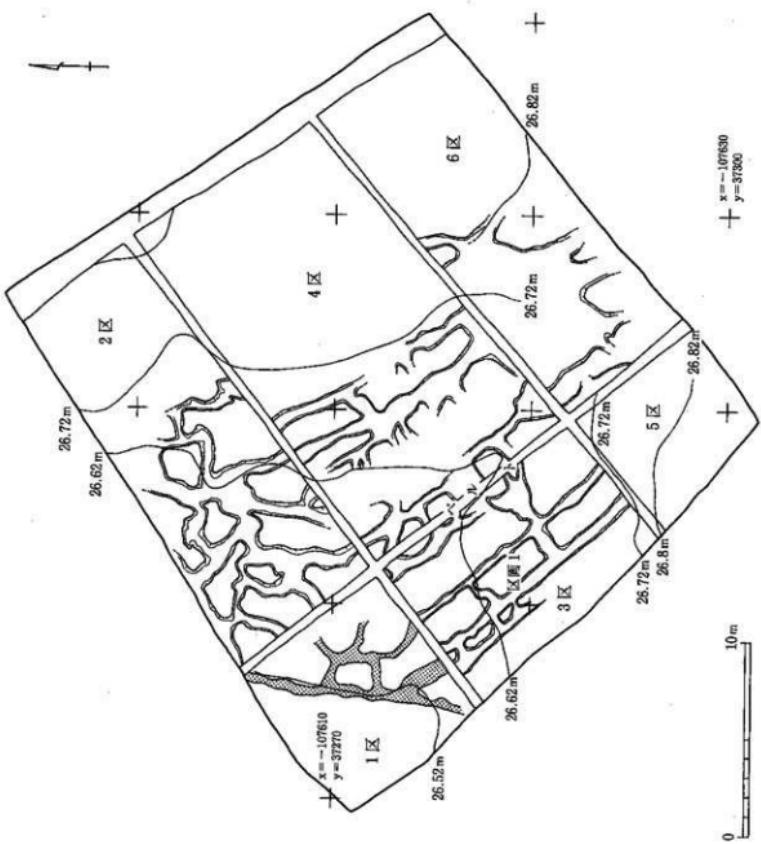
畔状の遺構はおむね北西（N45° - W）の方向を指向する。これらの畦畔状の遺構は大畦畔と考えられるが、それに付属する小畦畔の検出は困難であった。また、3区の畦畔は後世の溝による擾乱を受けている。溝の時期などは不明である。南端は微高地で高まりがあり、北東部では旧河川にともなう微高地が確認されており、コンタインも南から北に傾斜するラインと北東から南西に傾斜するラインがあり、南東から北西に向かってゆるやかに傾斜している。この傾斜に合わせて畦畔を造成したものと考えられる。水口などは確認できなかったが、灌漑は田越しままたは懸流灌漑と考えられる。地形の傾斜から北東部か南西部の微高地から水を落としていると考えられるが、灌漑用の溝などは検出されなかった。区画1は約3m×1.5mのほぼ長方形であり、水田の区画法は小区画と考えられ、形態は長方形に近いものと考えられる。

1・2区の畦畔状の遺構は、ほぼ北の方向を指向している。この区画の畦畔状の遺構の検出は第VI層の上面での検出が難しく、第VI層の中層で酸化鉄がまとまって沈殿していることが土層断面で確認されたことから、第VI層の中層で検出した。同じ黒褐色層のなかでの検出のため非常に難しい作業であった。1区では検出した層の高さが低く、畦畔状の遺構の下層を検出したものと考えられる。疑似畦畔Bと考えられる。3・4区で検出した畦畔とは方向などのずれが起こっているが、それは畦畔の造成が時期的に異なるためと推定される。しかし、コンタインとほぼ平行に畦畔が造られていることにより、地形の傾斜に合わせて畦畔が造成されている。灌漑は溝などの検出はできなかったが、田越しままたは懸流灌漑と考えられる。区画法は小区画と考えられるが、区画の大きさが非常に小さい。これは畦畔の検出が難しく、とくに小畦畔は造り替えが度々行われたと考えられることから検出が難しく、また一部水田の床面まで掘り下げてしまったことなどの要因が考えられる。1区は畦畔の高まりと床土の区別がつきにくいために、検出のみで終了した。

A区では、2方向に指向する畦畔状の遺構が検出された。河川にともなう自然堤防の後背湿地に形成された水田と考えられる。地形的には西から東に傾斜した窪地状の土地に、地形の傾斜に合わせて畦畔を造成しているものと考えられる。

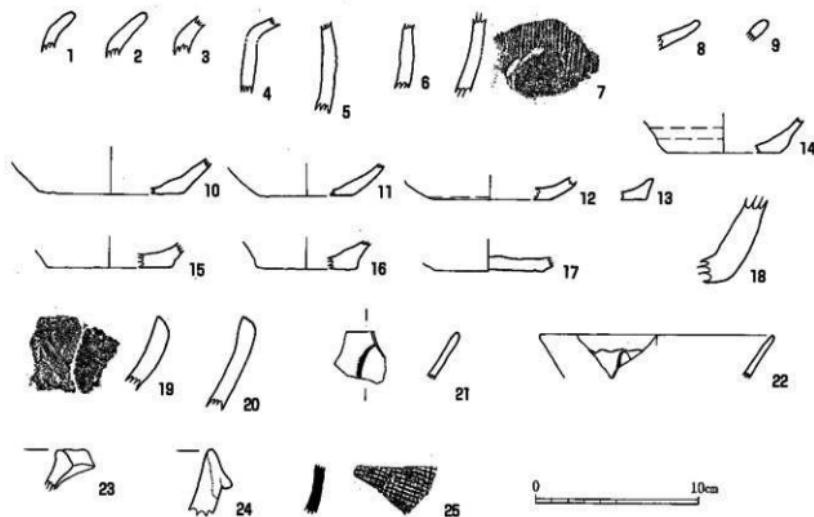
(4) 遺物（第8図）

遺物は主に第V層より出土したが、全体的に小片が多く図示し得るものは少ない。また風化が著しく地形的な要因からも流れ込みとも考えられる。1～3は壺の口縁～頸部で、口縁部は外に広がりをみせている。内面調整はヨコ方向のハケメである。外面は風化のため明瞭ではないがナデ調整である。4は壺の頸部で、1～3と同様に口縁部は外方に伸び、次の5・6と同様に胴の内面にタテ方向にケズリがみられる。内面には凸部がみられるが、特に風化が激しく明瞭でない。5・6は壺の胴部で外面はヨコ方向のナデ調整、内面はタテ方向の下から上へのケズリ調整である。1～6の時期は平安時代と思われ、形態的には近似するものと思われる。7は外面にタテ方向のハケまたは貝殻条痕を施しており、胎土に白色岩片（長石か）を非常に多く含むことから縄文土器の可能性が高い。器種は壺または深鉢と思われる。時期は縄文から古代と思われるが確定は難しい。8は土師坏の口縁部であり、風化が著しい。9は器種不明である。ヨコナデ調整であり、口唇部は風化気

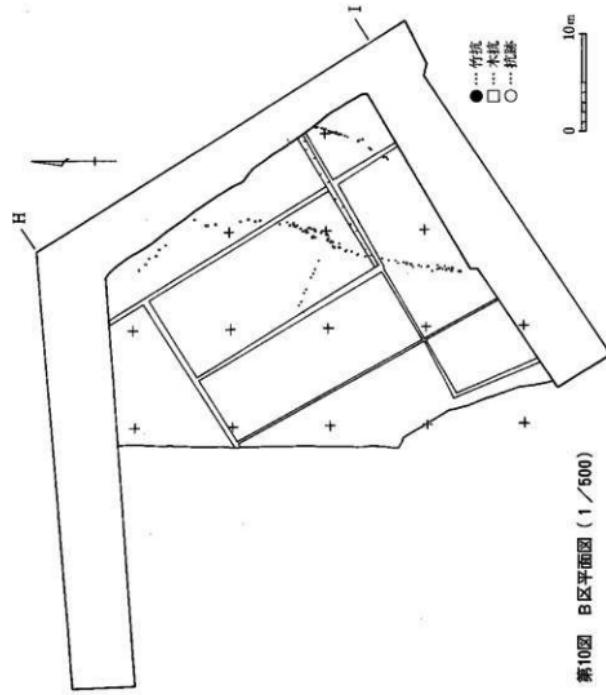


第7圖 A區地盤探査狀況

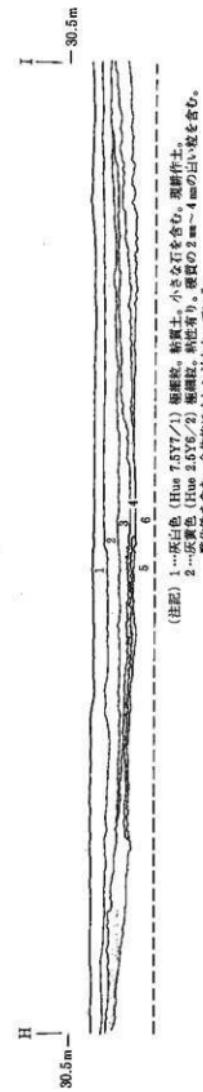
味である。10~16は土師皿・坏の胴部~底部である。外面の風化が著しく調整は不明である。10の内面はヨコナデ調整で、底面の剥離状態から高台のついていた可能性もある。11は小型の坏の底部である。12はナデ調整であり、ヘラ切り底である。13は坏である。14の内面はナデ調整である。15は坏の底部で風化しており、ヘラ切り後ナデ調整をおこなっている。16は風化が著しく外面の調整は不明であるが、内面はナデ調整である。17は土師皿・坏の底部で、ナデ調整、ヘラ切り離しの痕跡が確認できる。また底部と胴部の粘土のつなぎ目が確認される。18~20は布痕土器である。18は底部~胴部で風化しているため外面の調整と内面の布目痕は認められない。19は口縁部で、外面はナデ調整で、内面は粗い布目痕が認められる。部分的に風化している。20は口縁部で全体的に風化が著しく、調整や内面の布目痕は確認できなかった。21~22は青磁碗の口縁部であり施釉貫入がある。21は口縁部下に蓮弁文状の線を陰刻する。22は13世紀から14世紀の龍泉窯で、口縁部下に蓮弁文を陰刻する。23は須恵質土器の鉢の口縁部で注口がある。器面調整はナデである。24は備前の鉢(播鉢か)の口縁部と思われ、口縁部は折り返しである。ヨコナデ調整である。25は須恵器坏の胴部片と思われる。外面は格子目の叩きであり、内面には當て具の痕跡はみられない。



第8図 A区出土遺物 (1/3)

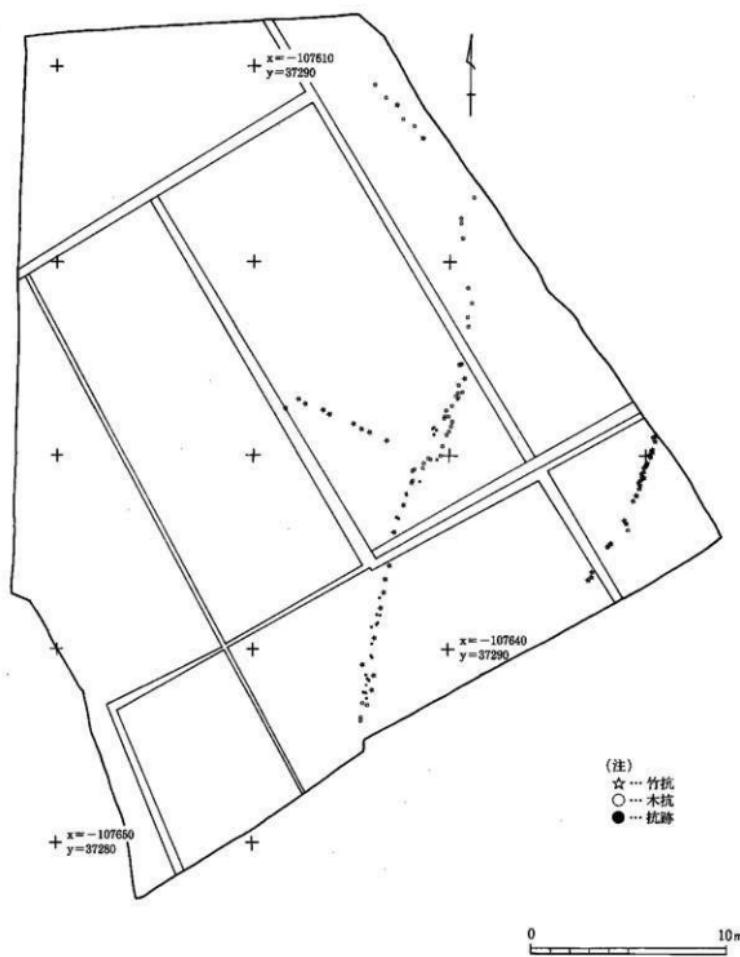


第10図 B区平面図 (1/500)



第9図 B区土質断面図 (1/50)

(注記) 1…灰白色 (Hue 7.5Y7/1) 砂砾地。軽質土。小さな石を含む。 2…灰黄色 (Hue 2.5Y6/2) 砂砾地。粘性有り。硬質の 2 mm ~ 4 mm の良い粒を含む。 3…褐色 (Hue 10Y5B/1) 砂砾地。粘性有り。マンガンを含む。 4…褐色 (Hue 10YR4/1) 砂砾地。粘性有り。マンガンを含む。 1 mm の良い粒を含む。



第11図 B区構造検出状況 (1/250)

2 B 区の調査

(1) 層序 (第9図)

B区は北東部の台地の縁辺に位置することより、台地からの土砂の流れ込みの影響が考えられる。第Ⅰ層は、西側の土層断面である。第Ⅱ層と第Ⅲ層、第Ⅳ層と第Ⅴ層はほぼ水平に堆積している。耕作痕である巻き上げが、第Ⅲ層と第Ⅳ層にみられる。第Ⅵ層はグライ層であり、地下水の影響を常に受けている。第Ⅲ層から第Ⅴ層にはマンガンが含まれる。第Ⅲ層は北から南にかけてレンズ状に堆積している。プラント・オパール分析の結果では、第Ⅲ層から約2,300~3,000個／g前後と第Ⅳ層から1,000個／gと低い値であるがイネのプラント・オパールが検出された。

(2) 調査の概要

B区は、調査対象地の北東部の水田地帯に位置する(第2図)。第Ⅱ層まで除去し、第Ⅲ層から精査を行った。しかし畦畔状の高まりを土層断面では確認できず、また平面的に精査を行ったが畦畔の検出はできなかった。木杭の列を第Ⅳ層から検出したが、同じ層から出土した遺物は近世以降の陶器類がほとんどであった。調査は、畦畔の検出が困難なため、杭列の検出をもって終了した。

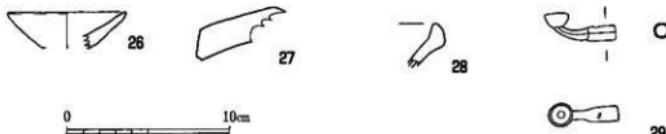
(3) 遺構 (第10~11図)

畦畔の検出はできなかったが、時期不明の杭列を検出した(第10~11図)。杭は木杭と竹杭であり、杭列はほぼ南北方向に指向している。杭の大きさは径5cm以下のもので、杭列がほぼ3列並んでいる。

共伴した遺物は近世以降の陶器であることから、近世以降の水田にともなう杭と考えられる。この杭の性格は現在のところ不明である。こうした杭は畦畔の補強に用いられた例が多いことから、畦畔の補強材の可能性が考えられる。しかし畦畔自体の検出ができなかつたため断定することはできない。

(4) 遺物 (第12図)

出土した遺物は少なく、杭列を検出した第Ⅳ層から近世以降(18世紀以降)の陶器類を検出した。26は、陶器器の碗の口縁~胴部と思われる。明の時代の陶器が火炎をおびている。27は素焼きの瓦で、焼成は酸化焰のためか明るい橙色である。胎土に織模様の白色部分がある。ナデ調整であり、端部と側面にヘラによる面取りがされていることが確認できる。28は須恵質土器の鉢の口縁部である。29はキセルの先端部である。また時期不明の木製品が1点出土したが用途不明である。



第12図 B区出土遺物 (1/3)

第1表 梅ヶ島遺跡出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種・部位	出土地点	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土師器	壺 口縁～頸部	A区				横方向のハケメ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	2mm以下の灰褐色・褐色粒。 1mm以下の輝石。	
2	土師器	壺 口縁～頸部	A区				横方向のハケメ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	5.5mm以下の灰褐色粒。 1mm以下の褐色粒。 微細な赤色粒・石英・輝石。	
3	土師器	壺 口縁～頸部	A区				横方向のハケメ	ナデ	にぶい黄 橙	灰黄橙	3mm以下の灰白粒。 1mm以下の黒色・灰褐色粒。 微細な輝石・石英。	
4	土師器	壺 頸部	A区				横方向の 縦方向に ハケメ	にけり	にぶい橙	にぶい橙	2mm以下の明闇灰色・黒褐色・灰白粒。 微細な石英・輝石。	
5	土師器	壺 頸部	A区				横方向の タテ方向の下から ナデ		浅黄橙	浅黄橙	3mm以下の灰褐色粒。 2mm以下の赤褐色粒。	
6	土師器	壺 頸部	A区				横方向の タテ方向に ナデ		淡橙	浅黄橙	7mm以下の灰白色粒。4mm以下の灰褐色粒。3mm以下の赤褐色粒。1mm以下の灰色粒。	
7	土器	麦又は深鉢 底部	A区				タテ方向の ハケまたは 貝殻状痕	ナデ	にぶい黄 橙	にぶい黄 橙	4mm以下の灰白粒。 2mm以下の浅黄橙粒。 1mm以下の黒色粒。	橈文土 器か
8	土師器	壺 口縁	A区				不明	不明	浅黄橙	浅黄橙	精良	風化著 しい。
9	土師質	不明 口縁	A区				ヨコナデ	ヨコナデ	灰白	灰白	精良	風化著 しい。
10	土師器	皿 底部～底部	A区				不明	ヨコナデ	にぶい橙	にぶい橙	精良	
11	土師器	皿 底部～底部	A区				不明	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	精良	風化著 しい。
12	土師器	皿 底部	A区				不明	ナデ	にぶい橙	橙	精良	風化著 しい。
13	土師器	皿 底部	A区				不明	ナデ	にぶい黄 橙	にぶい黄 橙	精良	風化著 しい。
14	土師器	皿 底部～底部	A区				不明	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	精良	風化著 しい。
15	土師器	皿～环 底部	A区				不明	ナデ	にぶい黄 橙	にぶい黄 橙	1mm以下の黒褐色粒。	風化著 しい。
16	土師器	皿～环 底部	A区				不明	ナデ	にぶい黄 橙	にぶい黄 橙	4mm以下の黒褐色粒。 1mm以下の褐褐色粒。	風化著 しい。
17	土師器	皿～环 底部	A区				ナデ	ナデ	にぶい黄 橙	にぶい黄 橙	灰褐色の微細粒を微含む。	
18	上器	布痕土器 底部～脚部	A区				不明	不明	橙	橙	1.4cm以下のにぶい褐色粒。9mm以下の明闇 色粒。2mm以下の灰白色粒。	風化
19	土器	有痕土器 口縁部	A区				ナデ	粗い布 目 痕	粗い布 目 痕	粗い布 目 痕	5mm以下の黒褐色粒。灰褐色の粒。 微細な灰褐色の粒。	部分的 に風化。
20	土器	布痕土器 口縁部	A区				不明	不明	橙	橙	微細な灰褐色・茶褐色粒。	風化が 著しい。
21	青磁	碗 口縁部	A区				施釉 貯入	施釉 貯入	オリーブ 灰	オリーブ 灰	精良	龍泉窯
22	青磁	碗 口縁部	A区	14.4			施釉 貯入	施釉 貯入	オリーブ 灰	オリーブ 灰	精良	龍泉窯
23	須恵質	鉢 口縁部	A区				ナデ	ナデ	灰黃・灰	灰黃	精良	注口有
24	須恵質	鉢(擂鉢) 口縁部	A区				ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色	にぶい橙	5mm大の乳白色粒。1.5mm以下の赤褐色・乳白色の砂粒。	
25	須恵器	坏 脚部	A区				格子目 たたき	ナデ	灰	灰	堅緻	
26	陶磁器	碗 口縁～脚部	B区				施釉	施釉	明オリーブ 灰	明オリーブ 灰	堅緻	明代
27	瓦		B区				ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	堅緻	
28	須恵質	鉢 口縁部	B区				ナデ	ナデ	灰白	灰白	精良	
29	金属器	環管 腹首	B区	長4.3	大直径 0.6	接合部径 0.45						重量 4g

第4節 自然化学分析調査の結果

自然化学分析は、株式会社古環境研究所に依頼して実施した。その目的は、プラント・オパール分析により調査対象層と調査範囲を確認するためである。A区・B区それぞれについて分析を依頼した。

宮崎県、梅ヶ島遺跡A地区におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山、1984）。

2. 試料

調査地点は、調査区南西端の a 地点、西側中央部の b 地点、北西端の c 地点、北側中央部の d 地点の 4 地点である。調査区の土層は、1 層（現表土、造成土）、2 層（灰白色シルト）、3 層（バミス混の褐色土）、4 層（暗褐色土）、5 層（灰白色砂質土）などに分層された。このうち 4 層は、前回の放射性炭素年代測定で $1,190 \pm 70$ y.B.P.（暦年代で AD775～960 年）の年代値が得られた黒褐色土、もしくは 920 ± 60 y.B.P.（暦年代で AD1030～1205 年）の年代値が得られた暗褐色土に対比される。分析試料は、2 層から 4 層までの層準から採取された計 19 点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（ 105°C ・24時間）
- 2) 試料約 1 g を秤量、ガラスピーブ添加（直径約 $40\mu\text{m}$ ・約 0.02 g）
※電子分析天秤により 1 万分の 1 g の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（ $20\mu\text{m}$ 以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏

光頭微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼブレバート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたブラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中のブラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10-5 g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属型（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4. 分析結果

水田跡（稻作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図4に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 審察

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稻作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稻作の可能性について検討を行った。

(1) a 地点（図1）

2層下部（試料1）から3'層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、3層（試料2、3）からイネが検出され、稻作が行われていた可能性が認められた。密度は1,000個/g未満と低い値である。イネの密度が低い原因としては、①稻作が行われていた期間が短かったこと、②土層の堆積速度が速かったこと、③洪水などによって耕作土が流出したこと、④採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、⑤稻藁が耕作地以外に持ち出されていたことなどが考えられる。

(2) b 地点（図2）

2層（試料1）から4層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、2層（試料1）と4層（試料4、5）からイネが検出され、稻作が行われていた可能性が認められた。このうち、4層（試料5）では密度が2,300個/gと比較的低い値であるが、直上の3層ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていたものと推定される。2層では、密度が1,000個/g未満と低い値である。

(3) c 地点（図3）

2層下部（試料1）から4層（試料5）までの層準について分析を行った。その結果、試料4を除く各層準からイネが検出され。稻作が行われていた可能性が認められた。このうち、4層（試料5）では密度が1,500個／gと比較的低い値であるが、直上層（試料4）ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていたものと推定される。2層下部（試料1）では、密度が1,000個／g未満と低い値である。

(4) d 地点（図4）

2層下部（試料1）から4層（試料4）までの層準について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネが検出され、稻作が行われていた可能性が認められた。密度は700～2,300個／gと比較的低い値である。

8.まとめ

以上のように、4層（暗褐色土層）では分析を行ったすべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。同層では、調査区の比較的広い範囲で稻作が行われていたものと推定される。また、その直上の3層（バミス混層）でも、B地点を除く各地点からイネが検出され、稻作が行われていた可能性が認められた。

参考文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の硅酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29。
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p.73-85。

表1 宮崎県、梅ヶ島港頭におけるプラント・オバール分析結果
検出割度(単位:×100個/g)

分類群/試料	A地点					B地点					C地点					D地点			
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4
イネ	8	7				8		8	23	8	22	22		15	8	15	23	7	
スキ属型	8	8	8	8		15	8			7	7	30	15	8	15		37		
タケ亜科	76	75	45	53	23	45	52	143	68	38	15	7	15	38	15	15	15	22	
推定生産量(単位:kg/m ² cm)																			
イネ	0.22	0.22				0.22		0.22	0.66	0.22	0.66	0.66		0.44		0.22	0.45	0.67	0.22
スキ属型	0.09	0.09	0.09	0.09		0.09		0.19	0.09		0.09	0.37	0.19	0.09		0.19		0.46	
タケ亜科	0.36	0.36	0.22	0.26	0.11	0.22	0.25	0.69	0.33	0.18	0.07	0.04	0.07	0.18	0.07	0.07	0.07	0.11	

※試料の比重を1.0と仮定して算出。

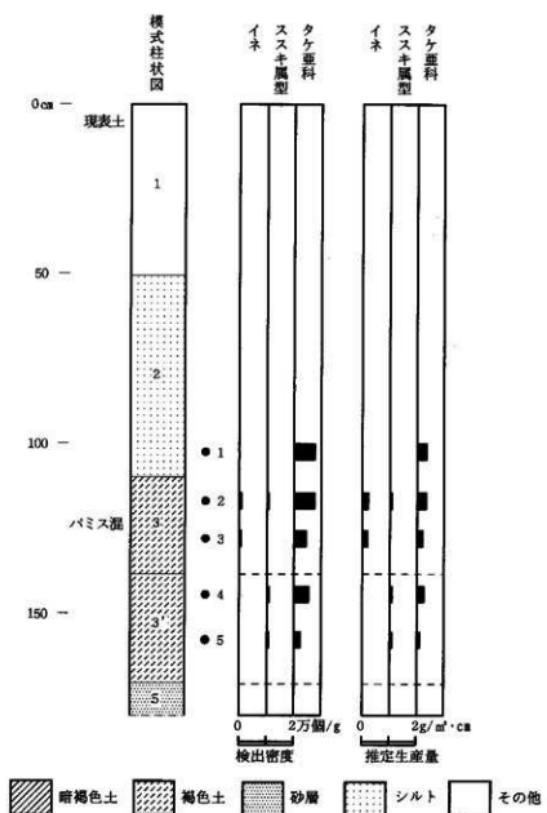


図1 梅ヶ島遺跡、A地点におけるプラント・オバール分析結果

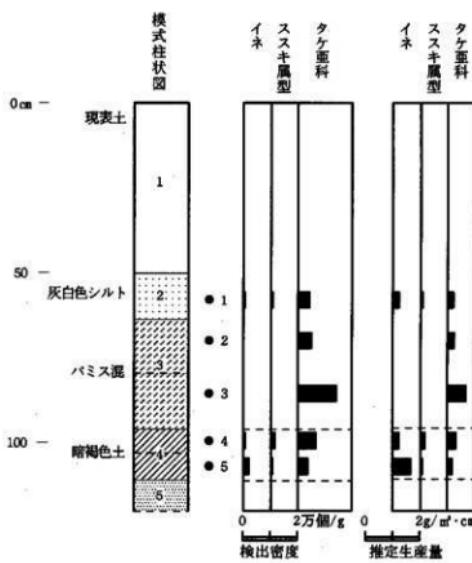


図2 梅ヶ島遺跡、B地点におけるプラント・オバール分析結果

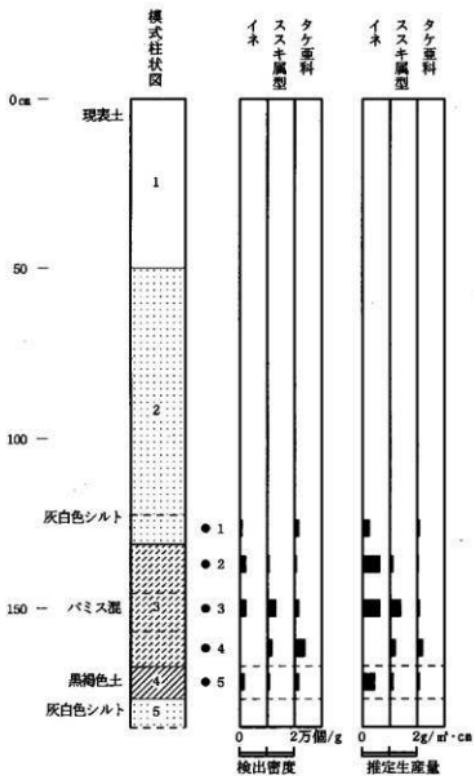


図3 梅ヶ島遺跡、C地点におけるプラント・オバール分析結果

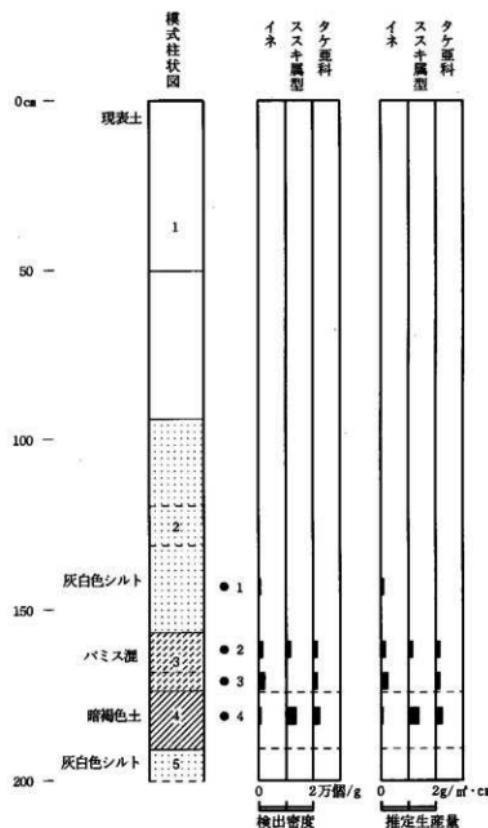


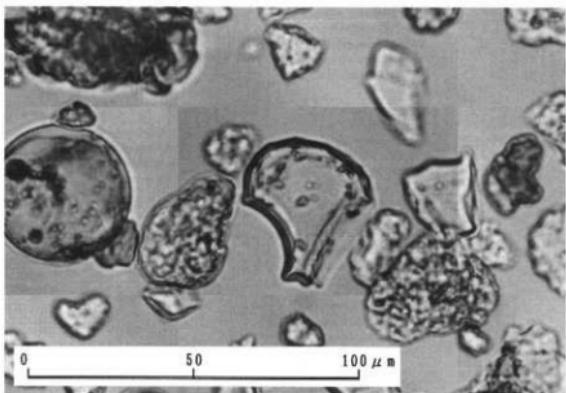
図4 梅ヶ島遺跡、D地点におけるプラント・オバール分析結果

植物珪酸体の顕微鏡写真

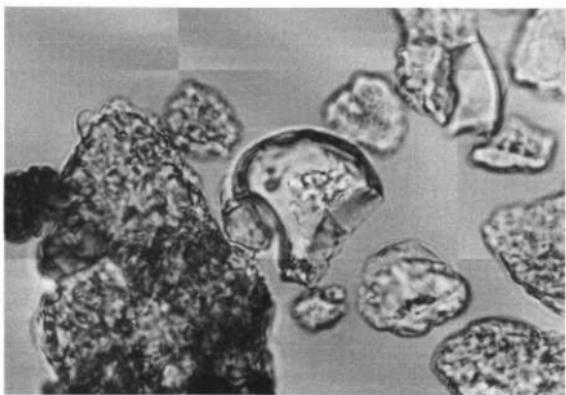
(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	C	2
2	イネ	D	1
3	スキ属型	D	4
4	シバ属	D	1
5	メダケ節型	B	3
6	ネザサ節型	D	3
7	クマザサ属型	C	1
8	ブナ科(シイ属)	D	4
9	マンサク科(イスノキ属)	C	4

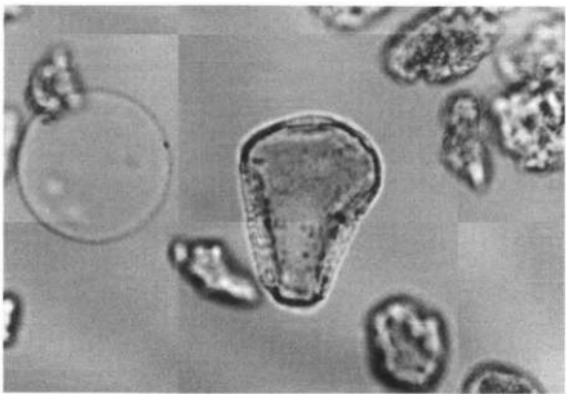
1

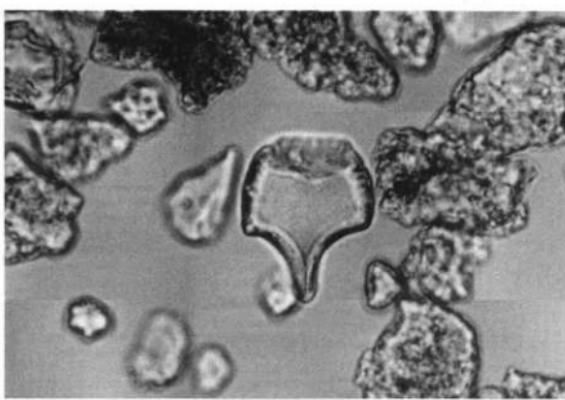


2

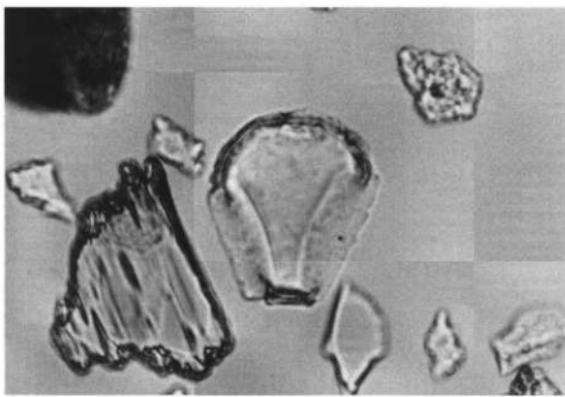


3

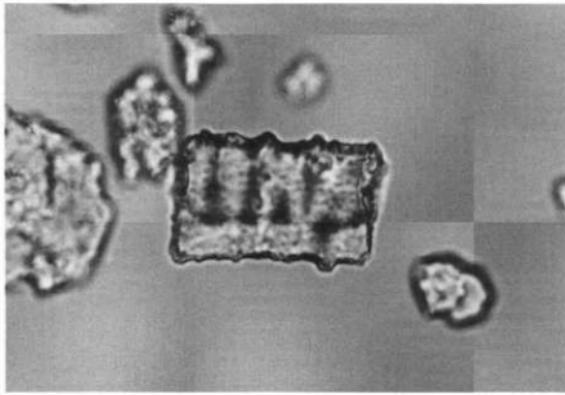




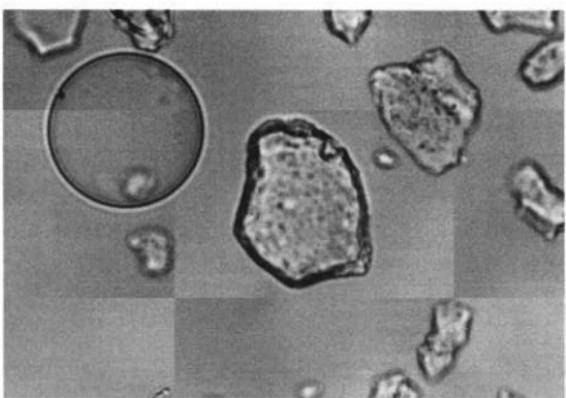
4



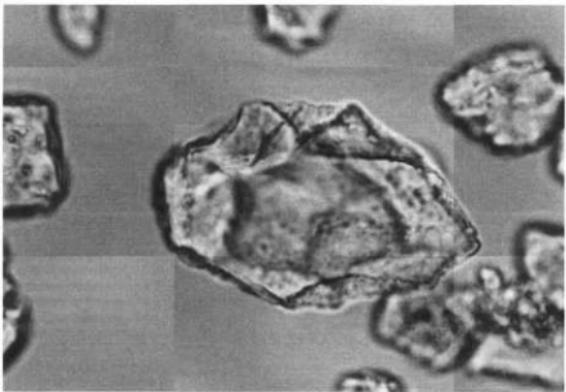
5



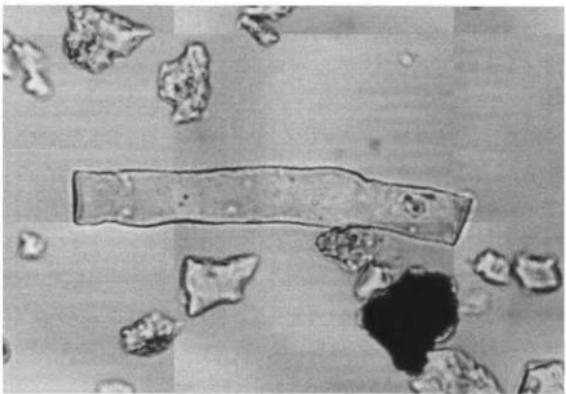
6



7



8



9

梅ヶ島遺跡B区におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 試料

調査地点は、調査区東側トレーニングの北側（No.1 地点）、中央（No.2 地点）、南側（No.3 地点）の3 地点である。調査区の土層は、1 層（現表土、造成土）、2 層（高原スコリアとみられるテフラ混）、3 層（灰色土）、4 層（暗褐色土）、5 層（灰白色砂質土）などに分層された。分析試料は、3 層から 5 層までの層準から採取された計26点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料約 1 g を秤量、ガラスピース添加（直径約 $40\mu\text{m}$ ・約 0.02 g）
※電子分析天秤により 1 万分の 1 g の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（ $20\mu\text{m}$ 以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1 gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料 1 g 中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位：10—5 g）をかけて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属型（ススキ）は1.24、タケアキ科（ネザサ節）は0.48である。

4. 分析結果

水田跡（稻作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～3に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 審査

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稻作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稻作の可能性について検討を行った。

(1) No.1 地点（図1）

3層（試料1）から5層（試料8）までの層準について分析を行った。その結果、3層下部（試料2）から4b層（試料6）までの層準からイネが検出され、稻作が行われていた可能性が認められた。このうち、3層下部（試料3）では密度が3,000個/gと比較的高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていたものと推定される。その他の層準では、密度が1,000個/g前後と低い値である。イネの密度が低い原因としては、①稻作が行われていた期間が短かったこと、②土層の堆積速度が速かったこと、③洪水などによって耕作土が流出したこと、④採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、⑤稻藁が耕作地以外に持ち出されていたことなどが考えられる。

(2) No.2 地点（図2）

3層（試料1）から5（試料10）までの層準について分析を行った。その結果、3層（試料1）から4層（試料6）までの層準からイネが検出され、稻作が行われていた可能性が認められた。このうち、3層下部（試料3）では密度が3,000個/gと比較的高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていたものと推定される。その他の層準では、密度が1,000個/g前後と低い値である。

(3) No.3 地点（図3）

3層（試料1）から5（試料8）までの層準について分析を行った。その結果、3層（試料1）から4層（試料7）までの層準からイネが検出され、稻作が行われていた可能性が認められた。密度は、3層上部（試料1）では2,300個/gと比較的低い値であり、その他の層準でも1,000個/g前後と低い値である。

6. まとめ

以上のように、3層下部（灰色土）および4層（暗褐色土）では、分析を行ったすべての地点からイネのプラント・オパールが検出された。これらの層では、調査区の比較的広い範囲で稻作が行われていたものと推定される。

参考文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の硅酸体標本と定量分析法－、
考古学と自然科学, 9, p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の
探査－、考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表1 富崎保、梅ヶ島瀬跡B区におけるプランクト・オパール分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群/試料	No.1 地点							No.2 地点										
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ	23	30	15	15	8				15	8	30	23	7	15				
スキ属型	8	8	15	15	23						8	15	7	8	15	15		
タケ亜科	39	38	22	23	8				15	53	23	98	15	15	8			

推定生産量 (単位: kg/m² · cm)

イネ	0.67	0.88	0.45	0.44	0.22				0.44	0.22	0.88	0.67	0.22	0.44			
	スキ属型	0.10	0.09	0.19	0.19	0.28			0.07	0.25	0.11	0.47	0.07	0.07	0.04		
タケ亜科	0.19	0.18	0.11	0.11	0.11	0.04											

*試料の比重を1.0と仮定して算出。

推定生産量 (単位: kg/m² · cm)

イネ	23	8	7	8	15	7											
	スキ属型	15	8	8	8	7	7	8									
タケ亜科	23	8	15	52	53	30	7										

*試料の比重を1.0と仮定して算出。

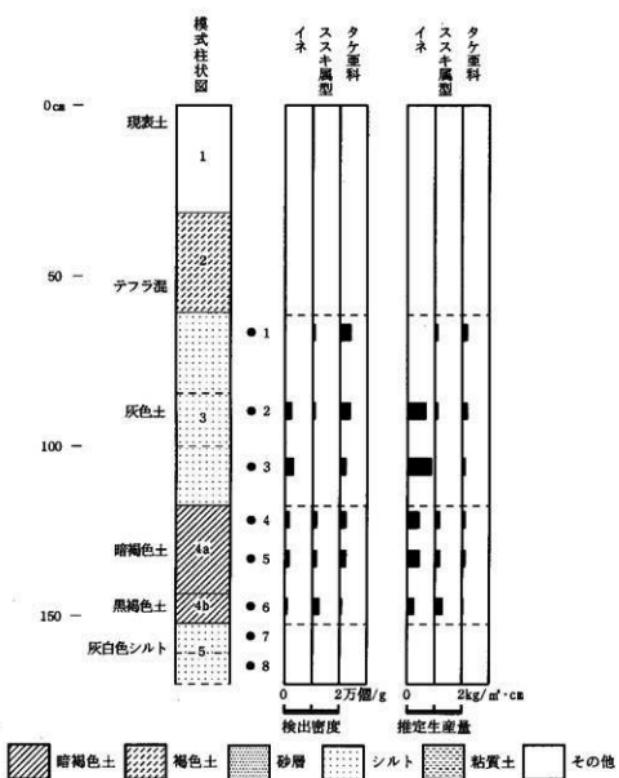


図1 梅ヶ島遺跡B地区、No1地点におけるプラント・オパール分析結果

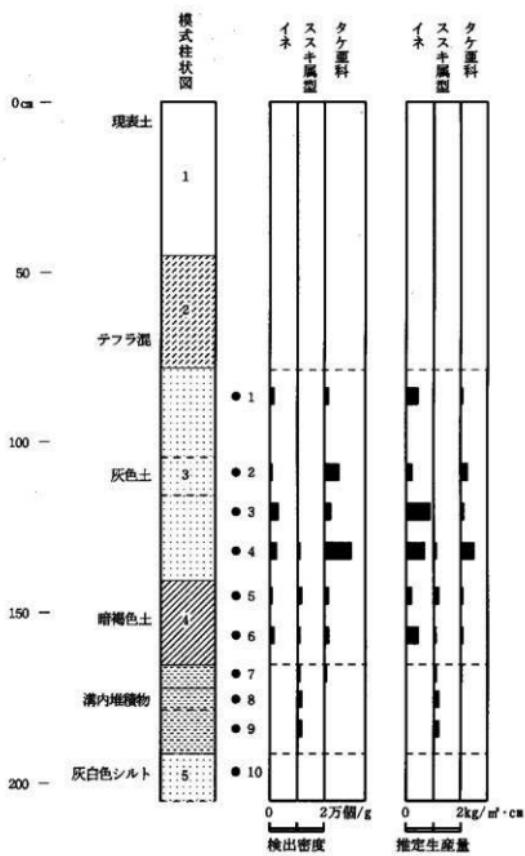


図2 梅ヶ島遺跡B地区、No 2地点におけるプラント・オバール分析結果

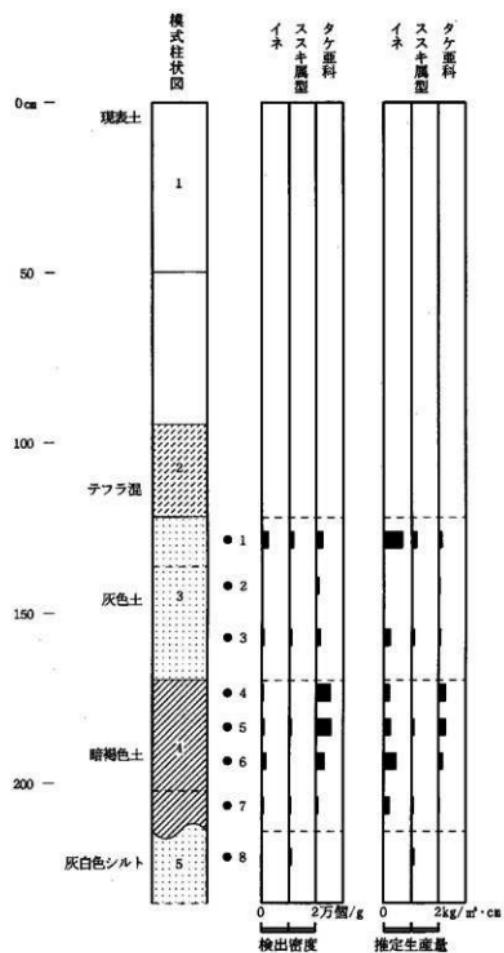
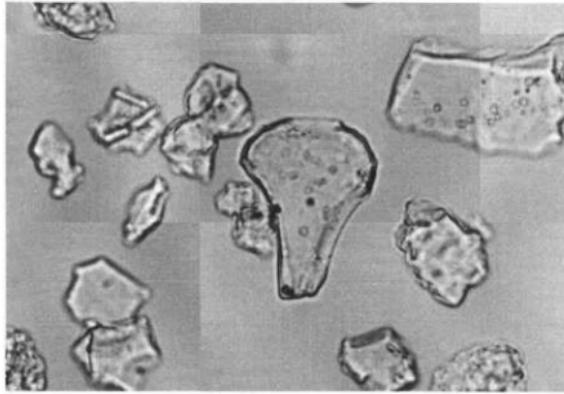
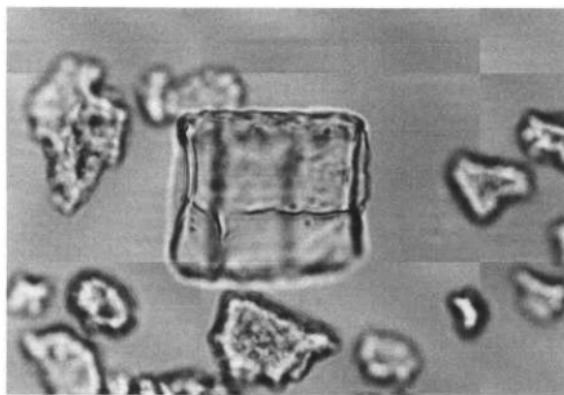
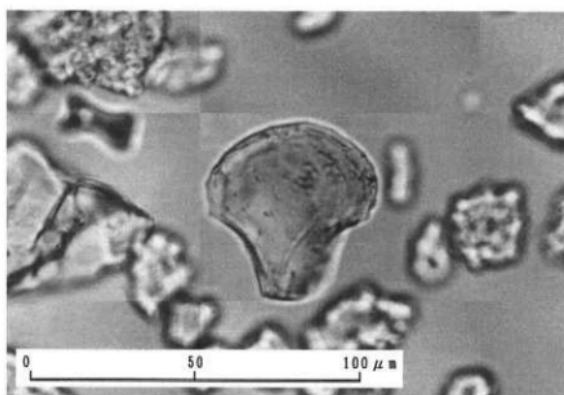


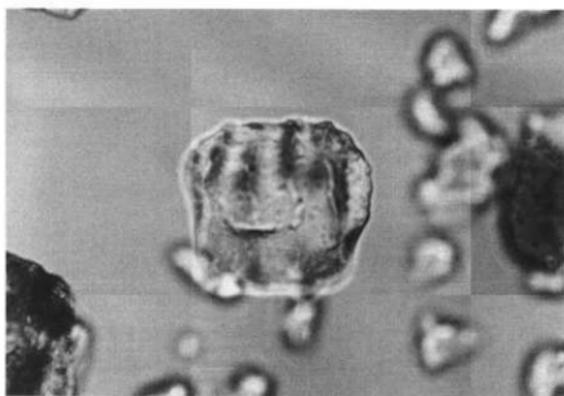
図3 梅ヶ島遺跡B地区、No 3地点におけるプラント・オバール分析結果

植物珪酸体の顯微鏡写真

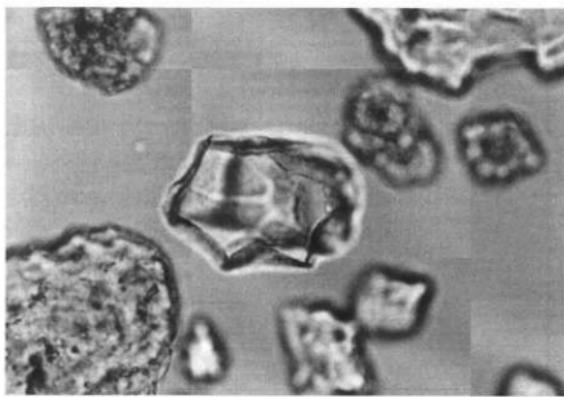
(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地點	試料名
1	イネ	No.1	3
2	イネ(側面)	No.1	3
3	ススキ属型	No.2	8
4	ネザサ節型	No.1	5
5	ブナ科(シイ属)	No.1	6
6	マンサク科(イスノキ属)	No.1	7

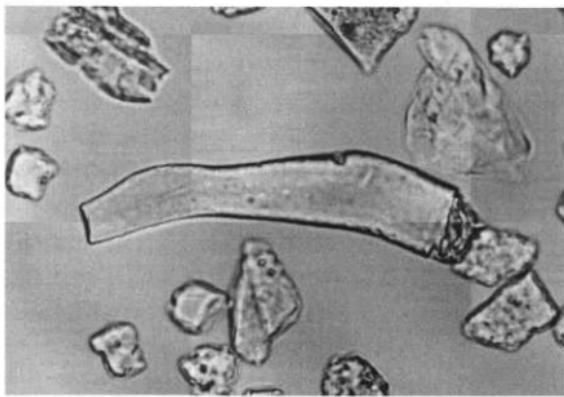




4



5



6

第5節 梅ヶ島遺跡土壤調査

綾町有機農業開発センター

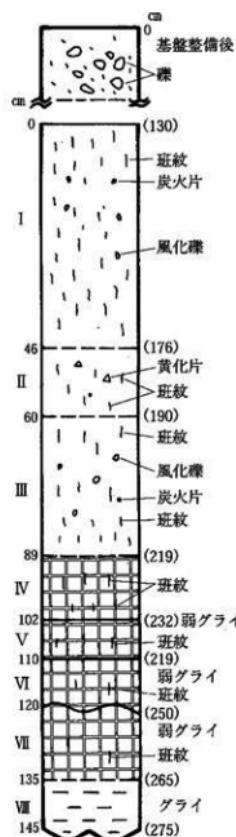
有村 玄洋

調査年月日：平成9年11月18日

調査地点：佐土原町西上那珂字梅ヶ島 A区南トレーニング面

土壤群（現在の水田）：灰色低地土；新宮川流域水田（基盤整備後）

土壤断面形態（地表面より約130cm程度カットした部分から観察した）



I 0-46cm(130-176cm) 黄灰(2.5Y4/1)色の砂質壤土(FSL)

発達強度の塊状構造、腐植は少ない、風化礫を少量含む、褐(7.5YR4/6)色糸根状斑～点状斑と黄褐(10YR5/8)色雲状斑が多く認められた。垂直壁面にフィルム状酸化鉄沈積物が多い、極少量の木炭片を含む、細孔隙がやや多い、可塑性中粘着性中、透水性中、ち密度は27mmでかたい、ジビリジル液による反応は認められなかった。層界は漸変

II 46-60cm(176-190cm) 灰(10Y6/1)色の埴壤土(CL)

発達中度の塊状構造、腐植は極めて少ない、風化小礫を含む、褐(7.5YR4/6)色糸状斑、極暗褐(7.5YR2/3)色点状斑が認められたが、上層より極めて少ない、炭化小粒片を含む、細孔隙が認められた。可塑性中、粘着性やや強、透水性中、ち密度は24mm、ジビリジル液による反応は認められなかった。層界は漸変

III 60-89cm(190-219cm) 灰(10Y6/1)色の埴壤土(CL)

発達中度の塊状構造、腐植は極めて少ない、風化小礫を含む、炭化小粒片を含む、明褐(7.5YR5/8)色雲状斑に富み、橙(7.5YR6/8)色雲状斑を含み、上層より多い、細孔隙を含む、可塑性中、粘着性やや強、透水性中、ジビリジル液による反応は認められなかった。ち密度は22mm、層界は明瞭

IV 89-102cm(219-232cm) 灰(10Y6/1)色の軽壤土(LiC)

発達中度の塊状構造、腐植は極めて少ない、暗褐(7.5YR3/4)色の点状斑～褐色(7.5YR4/6)色糸状斑があり、上層より少ない、細孔隙を含む、可塑性中、粘着性強、透水性やや中、ジビリジル液による反応はわずかに紫赤色を呈し、弱グライ化を示した、ち密度は22mm、層界は明瞭

V 102~110cm(232~240cm) オリーブ黄(5Y6/4)色の軽埴土(LiC)

発達弱度の塊状構造、腐植は極めて少ない、黄(5Y6/4)色雲状斑が多く、明黄(2.5Y7/6)色糸状斑がわずかに混在している、細孔隙を含む、可塑性強、粘着性強、透水性小、ジビリジル液による反応はわずかに紫赤色を呈し、弱グライ化を示した、ち密度は20mmで上層よりやや軟らかい、層界は明瞭

VI 110~120cm(240~250cm) 灰(5Y5/1)色の軽埴土(LiC)

発達弱度の塊状構造、腐植は極めて少ない、オリーブ黄(5Y6/3)色雲状斑が少量認められるが、上層より少ない、細孔隙を含む、可塑性強、粘着性強、透水性弱、ジビリジル液による反応はわずかに紫赤色を呈し、弱グライ化を示した。

ち密度は18mmで上層よりやや軟らかい、層界は明瞭

VII 120~135cm(260~265cm) 灰(5Y4/1)色の軽埴土(LiC)

発達極弱度の塊状構造、腐植にやや富む、オリーブ黄(5Y6/3)色の雲状斑をわずかに含む、細孔隙をわずかに含む、可塑性強、粘着性強、透水性弱、ジビリジル駅による呈色反応は紫赤色を呈し、弱グライ化を示した。ち密度は14mmで上層より軟らかい。層界はやや明瞭

VIII 135~145+cm(250~265+cm) オリーブ灰(2.5GY5/1)~青灰(10BG6/1) 色の軽埴土(LiC)

グライ層、壁状構造、腐植は少ない、上部にオリーブ黄(5Y6/3)色雲状斑がやや多くみられ、黄褐(10YR5/8)色の管状斑がごく少量みられた、可塑性強、粘着性強、ジビリジル液による呈色反応は鮮やかな紫赤色を瞬時に呈し、あきらかにグライ化を示した。ち密度は13mmで上層よりわずかに軟らかい。

本断面は新宮川流域左岸に分布しており、基盤整備水田表土より約130cm下にみられた断面である。I/II/III/IV層はいずれも酸化鉄斑、酸化マンガン斑が見られ、とくにI(多)/II(少)層およびIII(多)/IV(少)層の繰り返しがみられ、斑紋の集積状況の違いが認められた。V~VII層は弱グライ層~グライ層を示し、地下水の上下移動による停滞状況を示していた。

第6節 まとめ

梅ヶ島遺跡は、古代から中世にかけての水田に関連すると考えられる畦畔状の遺構を検出した。また近世以後の水田にともなう杭列を検出した。遺跡は台地に挟まれた低地である水田地帯に位置しており、河川の後背湿地である低湿地を開発して水田化し、また台地の縁辺部に水田を造成していたと考えられる。調査では畦畔状の遺構を数条検出したが、明確な区画などの検出はできなかつた。以下、A区で検出した水田遺構について若干の検討をしていきたい。

水田遺構について

梅ヶ島遺跡のA区で検出した畦畔状の遺構は、畦畔の方向がほぼ北方向と北西方向の2方向に指向している。そのために畦畔の方向が一致せず、また明確な区画は確認することができなかつた。コンタラインの方向と比較すると、傾斜の向きにはほぼ平行に畦畔が造成されている。畦畔が2方向に指向している要因を考えてみると、畦畔を検出した面が第VI層の上層であることと第VI層の中層であることが考えられる。第VI層は、層の中央部に鉄分が集中している部分がみられ、こうした鉄分の集中は畦畔の痕跡にもみられることがある。このことから時期的には少なくとも2時期の畦畔が検出された可能性がある。北に指向する畦畔は、第VI層上層で検出しておらず、旧地形が旧河川と微高地に囲まれた窪地と考えられることから、その地形の傾斜に合わせて大畦畔を造成していると考えられる。区画は高い位置の水田を小さな区画とし低い位置の水田をやや大きめな区画にしていると推定される。これは溜池や灌漑用水路を検出することはできなかつたが、灌漑方法を田越または懸流灌漑をとっているためなのか、湿潤地である土地で水を確保するためにとられた区画かのどちらかが考えられる。一方、北西に指向する畦畔は、旧地形が北西に傾斜することからその傾斜に合わせて大畦畔を造成したものと考えられる。いずれも水田に必要な灌漑水を確保するために、地形の傾斜に合わせて大畦畔を造成したものと考えられる。大畦畔にともなう小畦畔は水位を保つためにその都度造り替えていたために痕跡が残りにくく、検出が難しいものとなつた。新宮川に伴う自然堤防の後背地である湿地帶・氾濫原を造成していると考えられ、深い湿地であるか浅い湿田であるかは判断ができないが、1年中滞水している水田であった可能性が高い。こうした湿田では、一般に稻の生育が悪く収穫量も低かった。

次に水田遺構の年代であるが、時代を確定する遺物は供伴せず、上面の第V層から布痕土器と13～14世紀の龍泉窯の青磁が出土している。低地であるため流れ込みの可能性が強いために確定することはできないが、古代から中世にかけての水田遺構と考えられる。近年、河川の氾濫による土砂の堆積や火山灰の堆積によって、水田面がパックされた状態で発掘される例が県内でも確認されている。梅ヶ島遺跡では土砂の堆積や火山灰の堆積は確認されず、調査は、粘土層を削り精査するという作業をおこなつた。作業は土の色が明瞭でなく、度々調査区が台風などにより水没するなど非常に困難なものであった。最後にプラントオパールの数値が低いことについて検討をしていきたい。一般にイネのプラントオパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断されている。梅ヶ島遺跡では1gあたり2,000

～3,000個と低い値が確認された。この要因としては、新宮川の氾濫により稻などが流出した場合や湿地帯に広がる水田では稻の生育が悪く収穫量が少ないことが考えられる。土砂の堆積は確認されていないことから、後者の可能性が強い。

以上、A区で検出した水田に関連する遺構について検討してきた。一般に古代から中世にかけての水田は、山間・丘陵地の自然湧水利用可能な場所に開田された場合が多いとされている。近年の東国の中世村落史研究において、原田信男⁽¹⁾氏は関東平野における中世水田の主流は、台地部の開拓谷に設けられた谷田と自然堤防の後背地を利用した水田であることを明らかにした。しかし、江戸時代の新田開発をはじめて耕地になったと考えられていた利根川・入間川など大河川周辺地域で、堤修固から干拓へという水田開拓の動きが先行していたこと、「堀上田」という湿田農耕の技術の存在と比重の高さを明らかにした。つまり低湿地の開発は中世にはすでに行われていたのである。海津一朗⁽²⁾氏は、こうした技術を持つ関東武士団が元寇以後所領を持つ九州や東北に移住していくなかで、関東で蓄積した技術や引き連れてきた東国農民を駆使して低湿地の開発を行ったことを指摘している。関東平野の開発における経験や技術、従属する労働力をもった東国武士が西遷移住することによって、九州における低湿地の開発が進展したと考えられる。これらを実証し得る史料などは存せず、また実証するだけの力量を持たないが、九州における低湿地の開発は早く鎌倉後期よりは始まり、室町期には進展したと考えられる。今後、低湿地における発掘調査の成果が増えてくると思われるが、関東を中心とする東国農村史研究の成果をも視野に入れていくことが必要であろう。

(注)

- (1) 原田信男 1988「中世村落景観」(木村健編『村落景観の史的研究』八木書店)
(2) 海津一朗 1989「中世在地社会における秩序と暴力」(『歴史学研究』No.599)
同上 1990「東国・九州の郷と村」(『日本村落史講座』第2巻 雄山閣出版)

(参考文献)

- ・工楽善通 1991「水田の考古学」東京大学出版会
- ・高島綾雄 1997「関東中世水田の研究—絵図と地図にみる村落の歴史と景観—」日本経済評論社
- ・西田辰博 1996「古代末・中世の開拓」
〔中世莊園の世界—東寺領丹波國大山莊—〕(思文閣出版)
- ・藤原宏志 1998「稻作の起源を探る」岩波書店



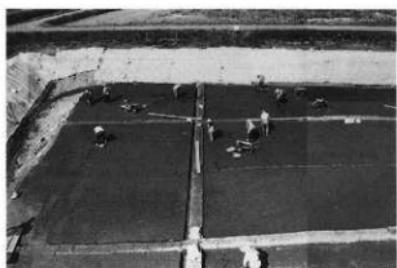
梅ヶ島遺跡遺跡（南から）



A区全景（西から）



B地区全景（西から）



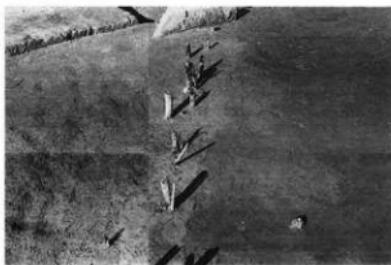
作業風景（A地区）



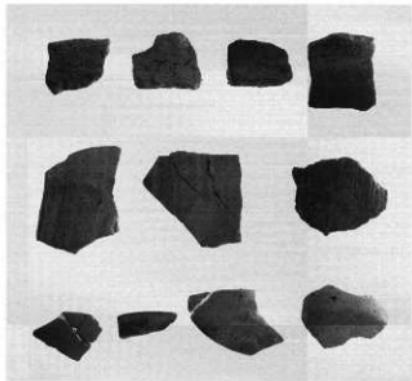
A地区土層断面



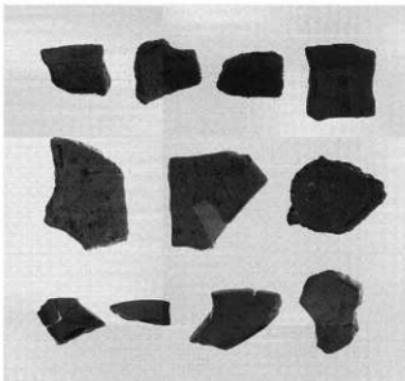
B地区土層断面



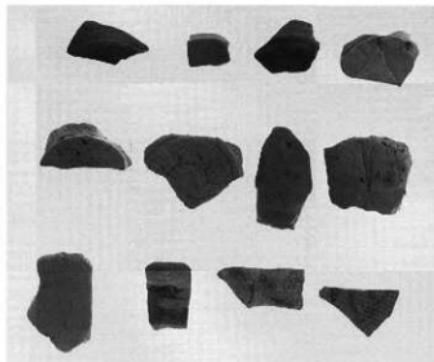
B地区抗列検出状況



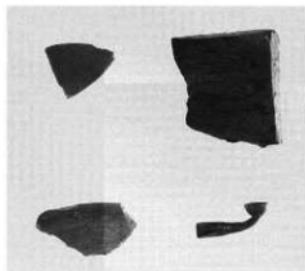
A地区出土遺物(1)外面



同右 内面



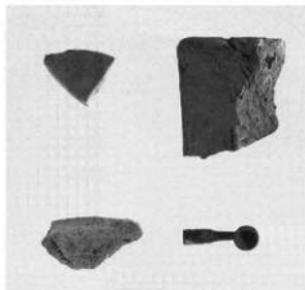
A 地区出土遗物(2)外面



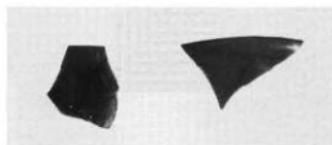
B 地区出土遗物(外面)



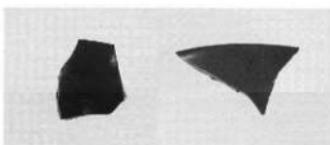
A 地区出土遗物(2)里面



B 地区出土遗物(里面)



A 地区出土遗物(3)外面



同左 内面

第Ⅳ章 大辻屋敷遺跡

第1節 調査の概要

遺跡周辺は、一つ瀬川とその支流の氾濫源にあり、水田と畠の混在する住宅地にある。水田や畠の標高は約6.7m内外であり、住宅地は標高約7~8m内外の微高地にある。調査地は、ほぼ平坦地にあるが、東西に比高差40cm程の若干の傾斜を持つ。

本遺跡は、平成10年7月の確認調査において調査対象地の西側に9本のトレンチ、東側に8本のトレンチを入れた結果、東側より須恵器片が数点と、焼土を含む土層と土師器片が出土したため、東側の約600m²を一次調査地に設定した。

一次調査では確認調査において、調査対象区の北側で須恵器等を数点と、焼土面を確認したため、遺物出土地点と焼土を確認した地点を中心に約600m²で調査に着手した。重機により表土及び第I層、第II層の除去を行ったが、調査区の南西側約30%は家屋撤去の際に廃棄物と思われるコンクリート片等が埋められており、遺物包含層まで攪乱を受けている。第III層を除去すると、調査地中央より畝状遺構を検出し、北側において溝状遺構を2条検出している。第IVa層中位より土師器片等が散見され、方形の竪穴状遺構を1基検出している。土師器片は摩耗風化が著しく、調整等の確認が困難なものが多かった。さらに掘り下げを進めると、炭化物を伴った焼土が3箇所、伴わない焼土が1箇所、確認された。この近くよりフイゴの羽口を確認した。また、調査地中央より須恵器片を中心とする土器集中箇所を検出した。

二次調査では、家屋の撤去終了後に行う予定であったが、諸般の事情により、家屋前庭の約100m²の調査となった。本格的に集落が形成されたと考えられる近世以降現代までの攪乱が著しく、遺物包含層や遺構の残存が極めて悪いため、攪乱の遺物を収集し、二次調査を終了した。

第2節 遺跡の基本層序

調査地は住宅地であったため、表層は造成されていた。また、家屋撤去の際に廃材等を埋めるなどしているため、遺物包含層まで攪乱を受けている所が見られた。第I層は、表土及び客土であり55cm程度である。第II層は暗黄褐色土層で粘性があるa層と、やや粘性があり硬いb層に分層できる。第III層は10cm内外で黒褐色を帯びており、やや粘性があり、硬い。

第IV層は明黄褐色土層で、40~50cmの堆積がある。第IV層も第II層同様、粘性によりa層とb層に分けることができる。この第IVa層中位から第IVb層上位にかけてが古代から中世の遺物包含層である。第V層は黄褐色土の砂質層で、青く筋のはいるb層に統いてa層の互層である。

表土下の土層堆積状況は、比較的安定した水平堆積を示しているものの、調査区の約30%は遺物包含層まで攪乱を受けており、調査区全般では安定している状況とはいえない。

第I層 表土
第IIa層 暗褐色土層
第IIb層 暗褐色粘質土層
第III層 黑褐色土層
第IVa層 明黄褐色土層
第IVb層 明黄褐色土層
第V層 黄褐色砂質土層
第Vb層

第13図 基本土層柱状図



第14図 周辺地形図（1 : 2000）

第3節 調査の記録

1 遺構

土器集中箇所（第16図）

調査区の中央付近より須恵器片を中心とした集中箇所を第IV a層の下面から第IV b層上面にかけて検出した。この集中箇所は、長軸3.2m、短軸1.7mを計り、須恵器片約170点、土師器片約10点を確認した。壺（66・68）、甕（69・71、73・74）、壺の蓋（41）と身（50）が出土しているが、いずれも完形がなく、ほとんど底部が欠けている。また、陶器とみられる壺（80・81）も出土している。この集中箇所周辺には掘り込み等の遺構は検出されていない。

竪穴状遺構（SZ 1）（第18図）

調査区南東側、第IV a層上で検出した。長軸1.34mの方形プランを呈する。径58cmの柱穴に切られしており、埋土は第III層の黒褐色土で灰白色のブロックを含んでいる。共伴する遺物が出土しておらず、性格、時期の特定はできない。

溝状遺構（SE 1）（第19図）

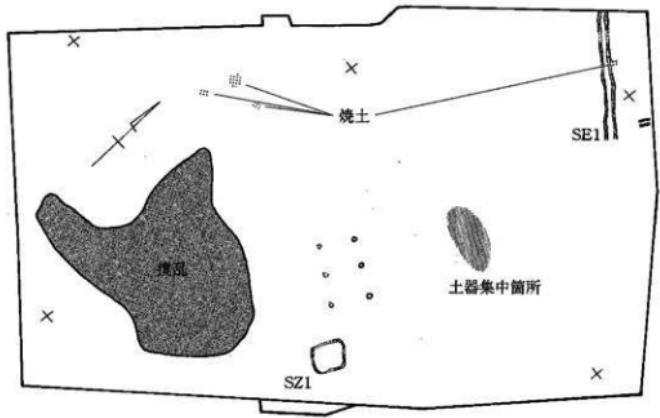
調査区北側、第IV a層上で検出した。溝の長さは約6.5m、溝幅約0.35m、検出面からの深さ約0.15mを測る。側壁にわずかの焼土と遺物片一点が確認されたが、溝の性格や時期を確定するにいたる遺物ではないため時期、性格が不明である。

柱穴（第15図）

調査区中央から東よりの第IV b層上面より柱穴列の突端部を検出した。検出面からの深さは3cm程度である。他の3つの柱穴はややにじむ程度でしか確認できず、掘立柱建物跡の復元には至らなかった。

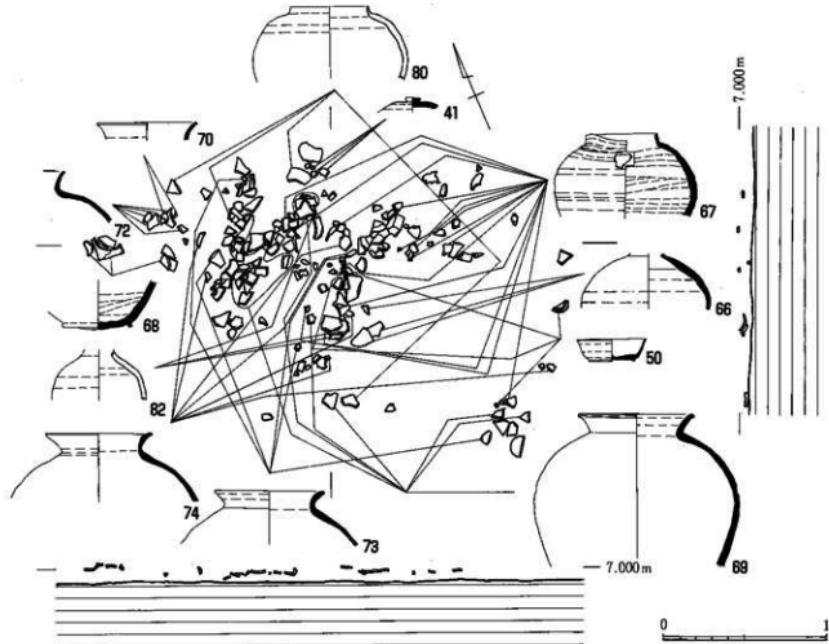
畝状遺構（第17図）

畝状遺構を第IV a層上で検出した。埋土は第III層の黒褐色土である。南側を攪乱により切られ、遺存状況が良好でないため、遺構の長さは明確でないが最大約12.5mを測る。溝幅約25cmと狭く、検出面からの溝の深さが5cm内外と浅い。共伴する遺物等は確認されていない。

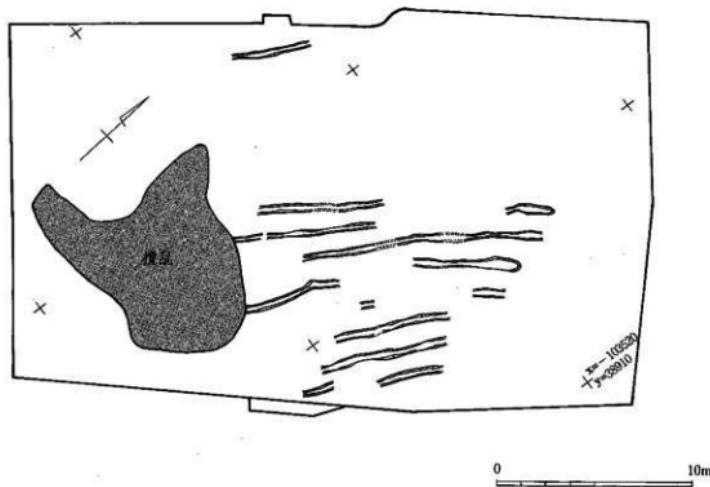


第15図 IVa層遺構分布図 ($S = 1/250$)

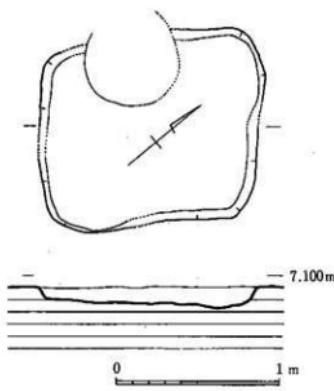
0 10m



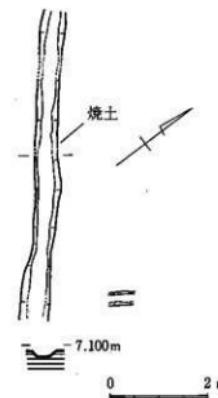
第16図 土器集中箇所接合状況図 ($S = 1/30$)



第17図 鉛状造構実測図 ($S = 1/250$)



第18図 SZ 1 実測図 ($S = 1/30$)



第19図 SE 1 実測図 ($S = 1/100$)

2 包含層出土遺物

分布状況は、調査区の北西付近と中央付近の須恵器片集中箇所にかけて出土している。須恵器片の集中箇所を除くと約170点の土器が出土している。出土した土器片の大半は壺が占め、古代の壺の口縁部が数点見られた。また、近世の陶磁器類も出土している。

土師器（第20図）

1～3は土師器壺の口縁部である。1、2は器壁が薄く、1は口縁端部がわずかに外傾する。3は黒色土器で内黒である。

4～19は土師器壺の底部である。完形に近いものが少なく、部分的に遺存しているものばかりである。4～14は底部と体部の境が明瞭で稜を持つものである。7は黒色土器で内黒である。11はヘラ切り状の底部を示す。15～19は底部と体部の境がやや丸みを帯び明瞭でなく、稜をなさない。19は壺の底部と思われる。

20～24は壺で、20では体部が内湾し、口縁部先端が先細りとなる。風化・摩耗が著しく、調整が不明である。

25、26は古代の壺である。頸部に明瞭な稜を持たず、緩やかに外反する口縁部を持つ。胴部内面は、縦方向のケズリがある。口縁部内外面共に回転ナデ調整（25）が見られる。また、25は頸部に僅かな突帶を持つ。26は風化が著しいため調整は不明である。27～31は、壺の口縁部のみである。

32・33は布痕土器の口縁部である。内面に布目圧痕を残す。外面は風化により調整が不明で指頭痕等は見られない。

34～39は土錐である。40はふいごの羽口で、端部に黒光りするガラス質状の鉱滓が付着している。

須恵器（第21～24図）

蓋

41～48は蓋である。41は撮を有し、焼成が完全ではなく、摩耗、風化が見られる。

42は口縁端部に返りが見られる。43～45は口縁端部のみの破片である。43・44は口縁端部が外傾しており、45は直行する。

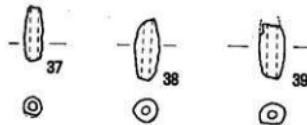
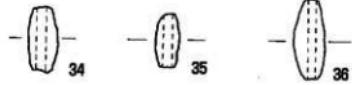
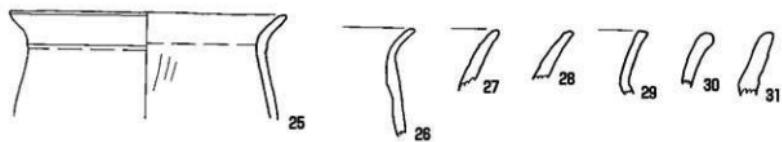
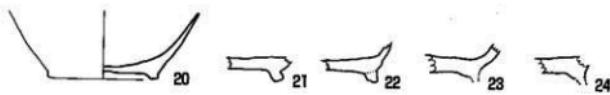
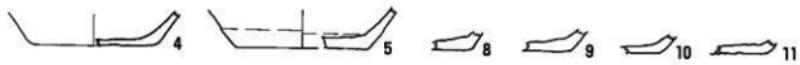
46は焼成が不良で内面の調整が不明である。48は壺の蓋である。

壺

49～56は壺である。49・50は高台付き、51～56は無高台である。49は体部がやや内湾する。50は直行し、口縁部が外反する。51は口縁部のみである。52・53・55は円盤状高台に近い形態をとる。54は高台痕がみられ、高台付きの壺であったと考えられる。

壺

57～68は壺である。57は長頸壺の口縁部付近である。58～60は壺の肩部周辺である。58・59は器種・部位ともに不明である。外面に自然釉が見られ、色調は暗オリーブを呈する。62は小型壺の肩部で、63と同一個体である。



0 10cm

第20図 包含層出土遺物実測図 (S = 1/3)

61と68は高台付きの壺である。61は短頸壺で、口縁端部が外反し、貼付高台である。68は貼付高台で底部中心部が高台より下にある。内面に斜方向、横方向のナデが見られるが、凹凸が著しく、荒い作りである。67は短頸壺であるが、外面の肩部付近に別個体が癒着し、そのため、癒着部分を中心に大きく歪んでいる。また、頭部と肩部の境に蓋をとる際に剥ぎ取られたと思われる蓋の口縁端部の一部と見られるものも癒着している。外面は自然釉が見られ淡緑色を呈している。

壺

69～79は壺である。69は口径20.8cmを計り、口縁部は頸部から直線的に外方向へ立ち上がる。外面は平行叩き、内面は同心円状の當て具痕が見られ、胴部下方には平行叩きも見られる。胴部下方では一部やや焼成不良が見られ、外面が摩耗気味である。

71は口縁部が外湾しながら外方向へ立ち上がり、端部は平坦である。70は71と同一である。73・74の口縁部は頸部から外反しながら外方向へ立ち上がり、途中やや肥厚し、端部は丸く取まる。74は口唇部にやや歪みが見られる。外面は平行叩き、内面は同心円状の當て具痕の後にナデ調整が見られる。

75～79は壺の胴部片である。75は外面が平行叩き、内面が同心円状の當て具痕が見られる。76・77は外面に格子目状の叩きが見られる。78は外面が平行叩き、内面が平行の當て具痕が見られる。79は外面が平行叩きで内面がナデ調整のあとタタキ痕が見られる。

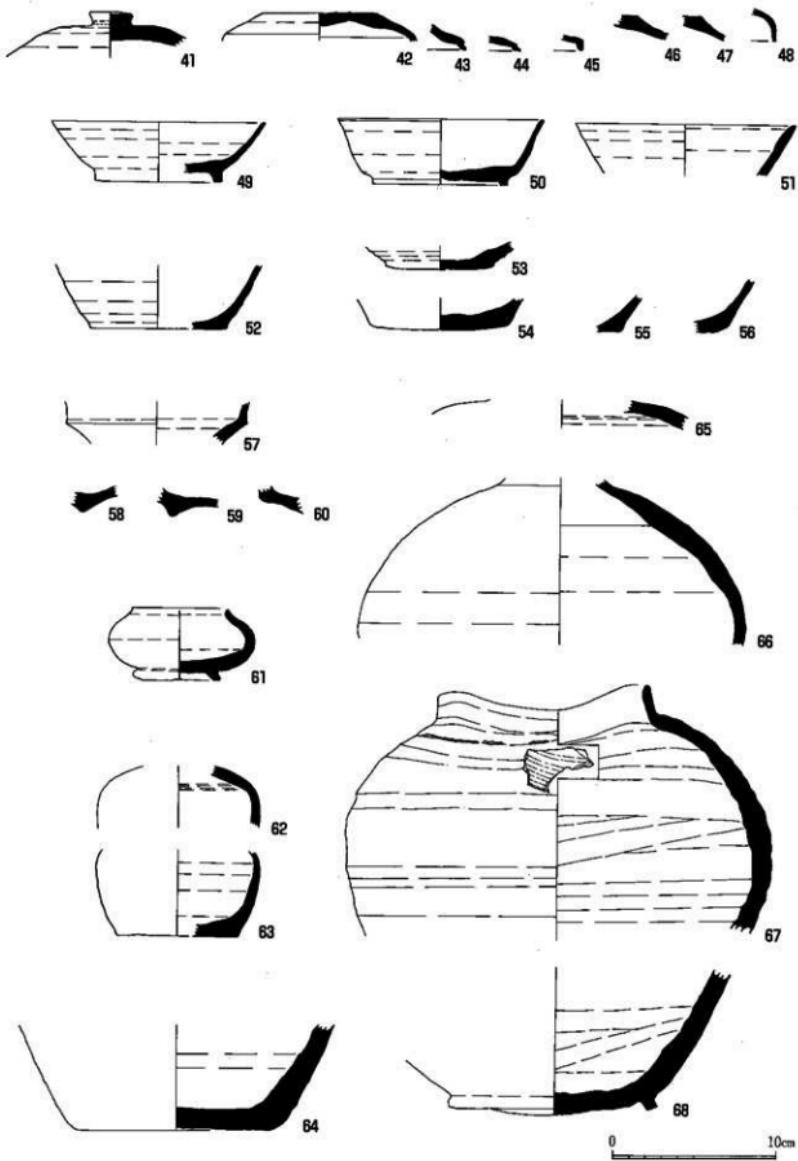
陶器・磁器等（第24～25図）

80～95は陶器・陶磁器である。80～82は須恵器集中箇所より出土している。80・81は外面に施釉は施されず、自然釉が見られる。82は壺の肩部から胴部であり、肩部付近に別個体の一部が癒着し、剥ぎ取った跡が見られる。

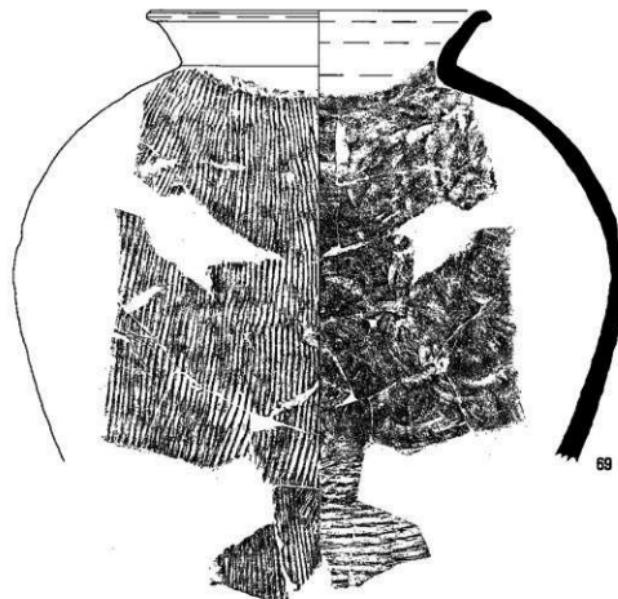
83・84は土師質の焰烙で、83は穿孔が見られる。

85～90は碗である。85は青磁碗で体部に刻線による連弁文が見られる。86は碗で口縁部を釉剥ぎしている。87は筒型碗で内外ともに染付が見られる。88は内が染付、外が青磁である。86～88とともに17世紀～18世紀のものである。89・90は19世紀の碗である。

91～93は皿である。91・92は17世紀の肥前の内野山窯跡である。鋼緑釉が施されているが、91は発色していない。93は17世紀の肥前の皿で見込みにコンニャク印判が見られる。94は17世紀前半の肥前の攝鉢である。7～9本を一単位とした描書きが見られ、口縁部には鉄釉が施されている。95は17世紀の肥前の壺である。外面は繩状突帯が2条見られ、内面に同心円状の當て具痕が見られる。



第21図 包含層出土遺物実測図 (S = 1/3)



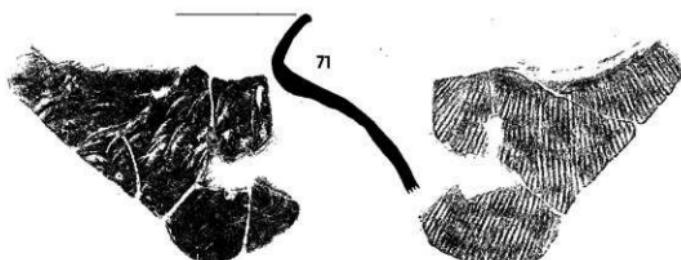
69



70



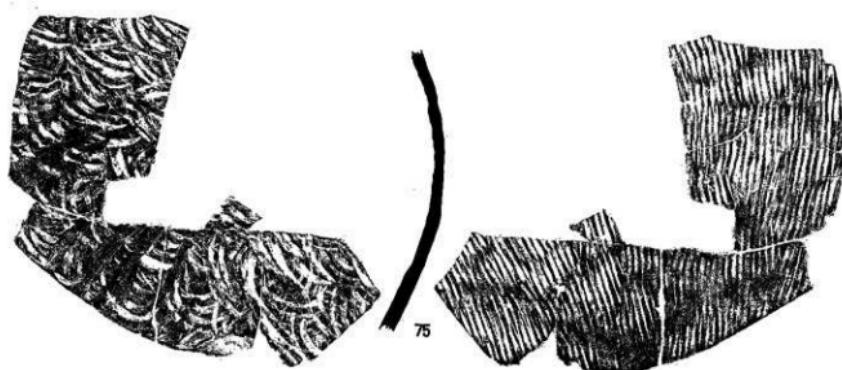
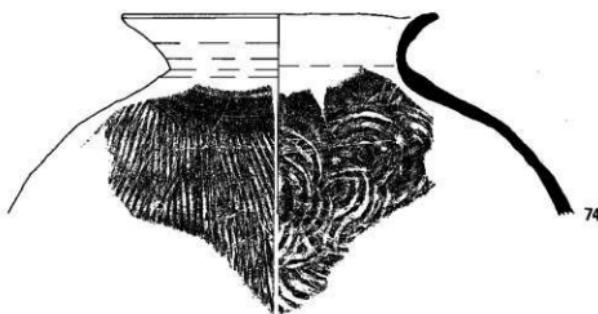
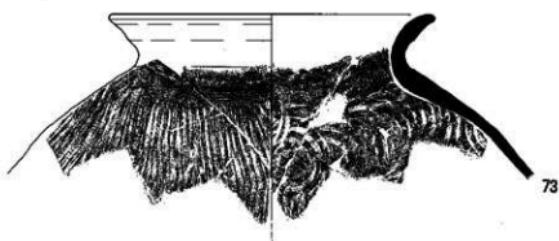
72



71

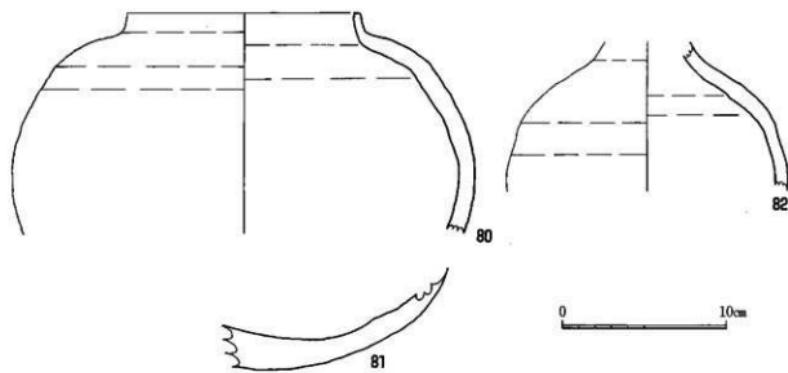
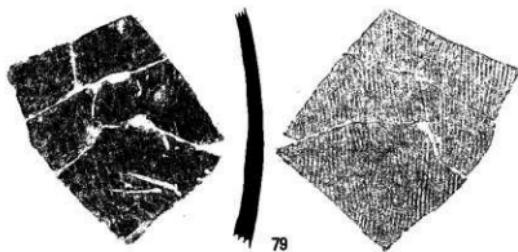
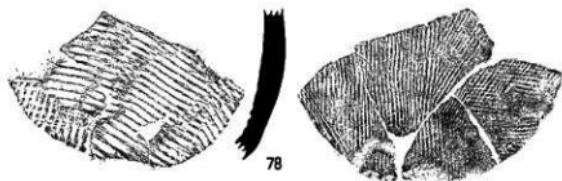
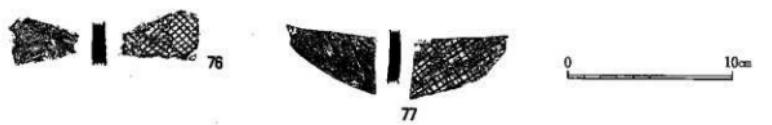
0 10cm

第22図 包含層出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

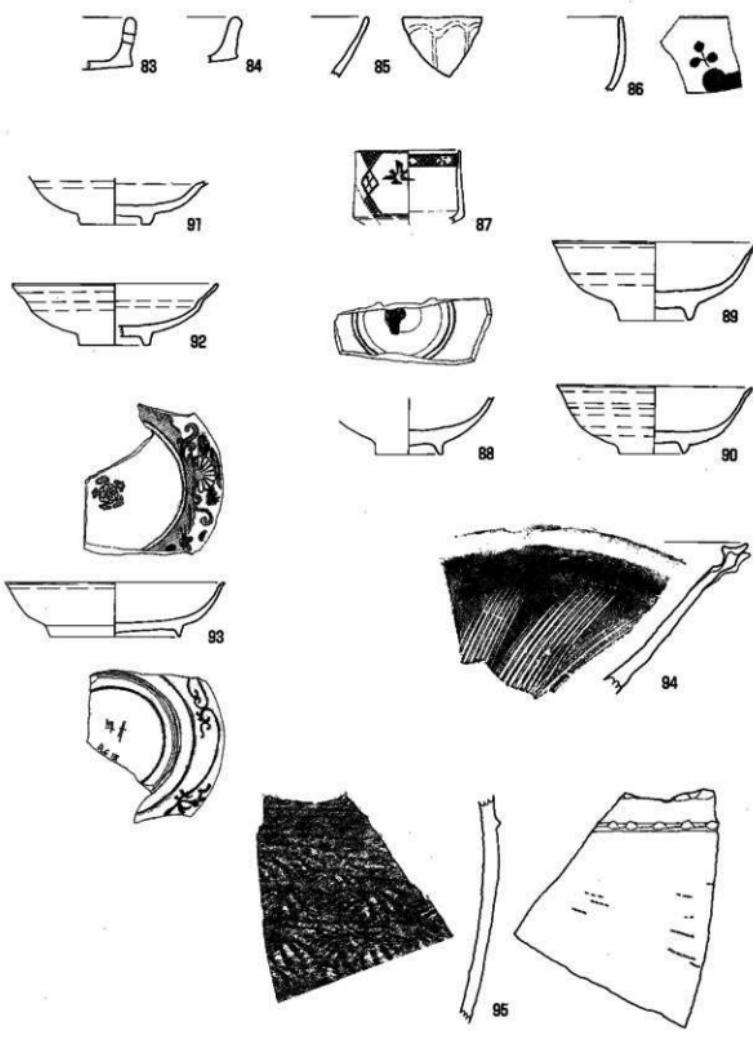


0 10cm

第23図 包含層出土遺物実測図 ($S = 1/3$)



第24図 包含層出土遺物実測図 (78・79は $S = 1/4$ 、他は $S = 1/3$)



第25図 包含層出土遺物実測図 (S = 1/3)

第2表 大辻屋敷遺跡出土土器観察表

遺物 番号	種別	器種・部位	出土 地点	法量(cm)		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考	
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	土師器	壊 口縁~体部	IV a層				回転ナデ	回転ナデ	赤	赤	1mm以下の黒色、白色粒を含む。	
2	土師器	壊 口縁~体部	IV a層				ナデ	ナデ	橙	橙	1mm以下の黒色粒を含む。 3mm以下の褐色粒を含む。	
3	土師器	壊 口縁	IV a層				風化の為 不明	内黒	黒	橙	精良	
4	土師器	壊 底部~体部	IV a層	(7.6)			ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	2mm以下の褐色粒、1mm以下の白色 粒を含む。	
5	土師器	壊 底部~体部	IV a層	(8.2)			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の褐色粒を含む。	
6	土師器	壊 底部	IV a層	(8.4)			風化が著 しい	にぶい黄 橙	にぶい黄 橙	2mm以下の褐色粒、1mm以下の白色 粒を含む。		外表面 付着
7	土師器	壊 底部	IV a層	(8.0)			ナデ	内黒	橙	黒	0.5mm以下の明褐色粒を含む。	
8	土師器	壊 底部	IV a層				風化の為 不明	回転ナデ	橙	橙	1mm以下の褐色、赤褐色粒を含む。	
9	土師器	壊 底部	T5-7				ナデ	ナデ	暗赤褐	橙	1mm以下の褐色砂粒、黒色砂粒を含 む。	
10	土師器	壊 底部	III層				風化の為 不明	風化の為 不明	浅黄橙	浅黄橙	0.5mm以下の褐色粒を含む。	風化が 著しい
11	土師器	壊 底部	IV a層				ナデ	ナデ	橙	橙	1mm以下の褐色粒を含む。	ヘラ切 り
12	土師器	壊 底部	IV a層				風化の為 不明	黄橙	黄橙	0.5mm以下の黄橙粒を含む。	風化が 著しい	
13	土師器	壊 底部	IV a層				ナデ	風化の為 不明	明黄橙	黄橙	精良	風化が 著しい
14	土師器	壊 底部	IV a層				横ナデ	横ナデ	橙	にぶい黄 橙	精良	風化が 著しい
15	土師器	壊 底部	IV a層				風化の為 不明	風化の為 不明	明赤褐	明赤褐	2mm以下の褐色粒、2mm以下の黒褐色 粒を含む。	風化が 著しい
16	土師器	壊 底部	IV a層	(8.4)			風化の為 不明	風化の為 不明	橙	橙	2mm以下の褐色粒、1mm以下の白色 粒を含む。	風化が 著しい
17	土師器	壊 底部	IV a層				ナデ	横ナデ	橙	にぶい赤	0.5mm以下の白色、黒色粒を含む。	
18	土師器	壊 底部	IV a層				横ナデ	横ナデ	橙	橙	1.5mm以下の褐色粒を含む。	
19	土師器	壊 底部	IV a層				風化の為 不明	風化の為 不明	浅黄橙	にぶい橙	1mm以下の褐色、黒色、白色粒を含 む。	
20	土師器	壊 口縁~底部	IV a層	(11.2) (3.4) (4.15)			風化の為 不明	風化の為 不明	灰白	灰白	1mm以下の白色粒を含む。	焼成 不良
21	土師器	高台付壊 底部	IV a層				ナデ	横ナデ	黄	暗灰黄	0.5mm以下の黒色粒を含む。	
22	土師器	高台付壊 底部	IV a層				風化が著 しい	風化のため 不明	灰黄	灰白	1mm以下の黒色粒を含む。	焼成 不良
23	土師器	高台付壊 底部	IV a層				横ナデ	回転ナデ	浅黄橙	浅黄橙	3mm程度の褐色粒、1mm以下の白色 粒を含む。	
24	土師器	高台付壊 底部	IV a層				風化の為 不明	回転ナデ	浅黄橙	にぶい黄 橙	2mm以下の茶褐色粒を含む。	外面黒 く變色
25	土師器	口縁~胴部	IV a層	(8.4)			横ナデ	横ナデ、ケ ズリ	米橙	浅黄橙	1mm以下の褐色粒を含む。	
26	土師器	堀 口縁~胴部	IV a層				風化の為 不明	ケズリ	橙	橙	2mm以下の黒色粒を含む。 3mm以下の褐色粒を含む。	
27	土師器	堀 口縁	IV a層				横ナデ	横ナデ	橙	橙	1mm以下の黒色粒を含む。 3mm以下の褐色粒を含む。	
28	土師器	堀 口縁	IV a層				風化の為 不明	風化の為 不明	橙	橙	1mm以下の黒色粒を含む。 3mm以下の褐色粒を含む。	風化が 著しい
29	土師器	堀 口縁	IV a層				風化の為 不明	風化の為 不明	橙	橙	2mm以下の黒色粒を含む。 5mm以下の褐色粒を含む。	
30	土師器	堀 口縁	IV a層				風化の為 不明	風化の為 不明	橙	橙	2mm以下の黒色粒を含む。 4mm以下の褐色粒を含む。	風化が 著しい
31	土師器	堀 口縁	IV a層				風化の為 不明	風化の為 不明	明赤褐	にぶい橙	3mm以下の白色磁物粒を含む。 1mm以下の透明磁物粒を含む。	風化が 著しい
32	土師器	鉢 口縁	IV a層				風化の為 不明	布直	橙	橙	1mm以下の茶褐色粒を含む。	
33	土師器	鉢 口縁	IV a層				風化の為 不明	風化の為 不明	布直	橙	0.5mm以下の白色粒を含む。	
40	土師器	フイゴ 羽口	IV a層				藍澤、氣 泡多数	自然釉	灰黄褐黑	黑	精良	
41	須恵器	壊蓋 つまみ付近	IV a層				回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	精良	焼成 不良

第2表 大辻屋敷遺跡出土土器観察表

遺物 番号	種別	器種・部位	出土 地点	法量 (cm)			手法・調整・文様はか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
42	須恵器	壺蓋	IV a層				回転ナデ	回転ナデ、灰付着	青灰	灰白	精良	
43	須恵器	壺蓋 口縁	IV a層				風化の為 不明	ナデ	灰白	灰白	精良	焼成 不良
44	須恵器	壺蓋 口縁	IV a層				ナデ	ナデ	灰白	灰	精良	
45	須恵器	壺蓋 口縁	IV a層				ナデ	ナデ	灰	灰白	精良	
46	須恵器	壺蓋	IV a層				回転ナデ	風化のため の不明	明紫灰	灰白	0.5mm以下の白色粒を含む。	焼成 不良
47	須恵器	壺蓋	IV a層				回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	0.5mm以下の白色粒を含む。	
48	須恵器	壺蓋 口縁	IV a層				回転ナデ、 自然釉	ナデ	暗灰	にぶい黄 褐色	1mm以下の褐色、黒色粒を含む。	
49	須恵器	高台付壺 口縁～底部	IV a層	(13.2)	(7.8)	(3.7)	ナデ	ナデ	暗灰	暗灰	精良	
50	須恵器	高台付壺 口縁～底部	IV a層 下層	(12.6)	(8.9)	(4.1)	回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	精良	
51	須恵器	壺 口縁～全体	IV a層	(13.4)			ナデ	ナデ	灰	灰	精良	焼成 不良
52	須恵器	壺 全体～底部	IV a層		(8.4)		風化が著し いため不明	不明	暗灰	灰	0.5mm以下の灰色粒を含む。	焼成 不良
53	須恵器	壺 底部	IV a層		(8.4)		點付高白釉	風化のため の不明	灰白	灰白	精良	焼成 不良
54	須恵器	壺 底部	IV a層		(6.7)		ナデ	ナデ	灰白	灰	精良	ペラ 切り
55	須恵器	壺 底部	IV a層				風化の為 不明	風化のため の不明	暗灰	灰	0.5mm以下の白色砂粒を含む。	焼成 不良
56	須恵器	壺 底部	IV a層				風化の為 不明	風化のため の不明	暗灰	灰	0.5mm以下の黒色粒を含む。	焼成 不良
57	須恵器	長甕壺 口縁	IV a層				回転ナデ	回転ナデ	灰	灰	2mm以下の白色、黒色の砂粒を含む。	
58	須恵器		IV a層				自然釉	ナデ	暗オリーブ	灰黄	精良	
59	須恵器		IV a層				自然釉	ナデ	暗オリーブ	灰黄	精良	
60	須恵器	壺 肩部	IV a層				自然釉	ナデ	灰黄	灰	精良	
61	須恵器	壺 口縁～底部	IV a層	(5.8)	5.4	4.3	回転ナデ、 自然釉	ナデ	紫灰	青灰	精良	高台 付き
62	須恵器	壺 肩部	IV a層				ナデ	ナデ	黄褐	暗青灰	精良	63と 同・
63	須恵器	壺 肩部～底部	IV a層		(7.4)		ナデ、自然 釉	回転ナデ	黄褐	暗青灰	精良	62と 同・
64	須恵器	割部～底部	IV a層		(11.6)		ナデ	自然釉	紫灰	灰白	精良	
65	須恵器	壺 肩部	IV a層				ナデ	回転ナデ	灰白	灰	精良	
66	須恵器	壺 肩部～腹部	IV a層				回転ナデ	ナデ	暗灰	明オリーブ	精良	
67	須恵器	壺 口縁～腹部	IV a層 下層	(11.8)			ナデ、自然 釉	横ナデ、新 めわたり	明黄褐色 黒	暗灰	精良	別個体片付 看のため並み
68	須恵器	壺 割部～底部	IV a層 下層		12.9		ナデ	横ナデ、新 めわたり	暗灰	暗灰	精良	高台 付き
69	須恵器	壺 口縁～腹部	IV a層 下層	(21.8)			平行タキ	平行タキ	同心円状のタキ 平行タキ	明銀灰	0.5mm以下の黒色、白色粒を含む。	
70	須恵器	壺 口縁	IV a層 下層	(9.0)			回転ナデ	回転ナデ	暗灰	灰	1mm以下の白色、黒色の砂粒を含む。	71と 同一
71	須恵器	壺 口縁～腹部	IV a層 下層				平行タキ	同心円状のタキ 平行タキ	にぶい赤 褐色	1mm以下の白色、黒色の砂粒を含む。	70と 同一	
72	須恵器	壺 口縁	IV a層				回転ナデ	回転ナデ	明オリーブ	明オリーブ	1mm以下の黒色の砂粒を含む。	
73	須恵器	壺 口縁～腹部	IV a層 下層	10.0			平行タキ	同心円状のタキ後ナデ	暗赤褐	赤	1mm以下の白色、黒色の砂粒を含む。	
74	須恵器	壺 口縁～腹部	IV a層 下層	19.1			平行タキ	同心円状のタキ後ナデ	暗赤褐	赤	1mm以下の白色、黒色の砂粒を含む。	
75	須恵器	壺 肩部	IV a層 下層				平行タキ	同心円状のタキ後ナデ	暗赤褐	赤褐	精良	
76	須恵器	壺 肩部	IV a層				格子目 タキ	タキ	灰	灰	精良	

第2表 大辻屋敷遺跡出土土器観察表

遺物 番号	種別	器種・部位	出土 地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				口径	底径	高さ	外面	内面	外面	内面		
77	須恵器	壺 肩部	IV a層				格子目タキ ナデ		灰	灰	精良	
78	須恵器	壺 胴部～底部	IV a層				平行タタキ ナデの後平行印き？		灰白	灰	精良	燒成 不良
79	須恵器	壺 胴部	IV a 下層				平行タタキ ナデ		灰	にぶい赤 褐色	1mm以下の白色粒を含む。	
80	陶器	口縁～胴部	IV a 下層	(14.2)			ナデ	ナデ	赤黒	赤	精良	
81	陶器	壺 底部	IV a 下層				ナデ	ナデ	赤黒	赤	精良	81と 同一 褐色付 着物
82	陶器	肩部～胴部	IV a 下層				ナデ、施釉 回転ナデ		オリーブ 緑	灰	1mm以下の黒色鉱物粒を含む。	
83	土師質	壺 口縁～底部	ラン				横ナデ	横ナデ	黄橙	黄橙	0.5mm以下の褐色、赤褐色粒を含む。	穿孔あり スズ付着
84	土師質	壺 口縁～底部	C 1 Ⅲ				横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	1mm以下の赤褐色粒を含む。	
85	青磁	碗 口縁	カク ラン				通弁、施 釉		緑灰	綠灰	精良	15世紀
86	磁器	碗 口縁部	C 1 Ⅲ				染付	口縁部が 窯胎	白	白	精良	
87	磁器	筒型碗 口縁～全体	T C 2	6.4			染付	染付	白	白	精良	肥前 17世紀
88	磁器	碗 底部	T 1				青磁、見込みに 窯の目輪剥ぎ	染付	白	白	精良	
89	磁器	口縁～底部	T 1	12.4	4.4	4.8	施釉	施釉	綠灰	綠灰	精良	19世紀
90	磁器	口縁～底部	T 1	12.0	4.2	4.3	施釉	施釉	灰白	灰白	精良	19世紀
91	陶器	皿 底面～全体	T C 1		4.3		ナデ、網目状 高台内窯胎	ナデ、蛇の 目輪剥ぎ	にぶい黄	にぶい黄	精良	肥前 内野山窯跡 17世紀
92	陶器	皿 口縁～底部	T 7	12.6	4.4	3.8	ナデ、網目状 高台内窯胎	ナデ、蛇の オリーブ 目輪剥ぎ	オリーブ 黄	オリーブ 黄	精良	肥前 内野山窯跡 17世紀
93	磁器	口縁～底部	T 6				染付、コン ニャック印物	「大明年製」	白	白	精良	肥前 17世紀
94	陶器	指鉢 口縁	T 7				ナデ	横ナデ、施 釉	赤	赤	精良	肥前 17世紀
95	陶器	壺 胴部	T C 2				繩状突起 2条	同心円状の凸起 有、滑溜か	極暗赤褐 墨	オリーブ 墨	精良	肥前 17世紀

第3表 大辻屋敷遺跡出土土錘計測表

遺物 番号	出土 地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	色調
34	IV a層	土錘	4.1	1.8	1.8	8.8	橙
35	IV a 下層	土錘	3.35	1.55	1.55	5.7	にぶい橙
36	IV a 下層	土錘	4.9	1.9	1.9	12.2	黄橙
37	IV a層	土錘	3.5	1.2	1.2	3.9	橙
38	IV a層	土錘	3.8	1.6	1.6	5.2	浅黄橙
39	IV a層	土錘	3.4	1.6	1.6	5.2	橙

第4節 まとめ

本遺跡の調査は大辻屋敷地名の由来ともなる屋敷跡が考えられたが、近世以降現代までの攪乱が著しいため、確証を得るには至らなかった。また、本遺跡の出土遺物は明確な遺構に伴うものではなく、包含層全般にわたって散見されたものであるため、遺跡の性格を確定するには判断材料が乏しい。ここでは以下、検出した遺構と出土土器について簡単にまとめる。

1 土器について

土師器の壺、坏、内黒土器、布痕土器、フイゴの羽口、土錘、須恵器の壺、壺、坏、蓋が出土した。陶器、陶磁器は第IV層までの攪乱からの出土であり、近世以降の攪乱と思われる。

出土土器の7割が須恵器である。土師器はその大半を坏が占めるが、ほとんど小破片ばかりで、完形になるものがなかった。また摩耗、風化が著しいため調整等が不明のものが多い。当地は、かつて度々水害等にさらされた所であり、水の浸食を受けているものと思われる。須恵器の出土では須恵器集中箇所で6割を占めている。この集中箇所では、他の個体が癱着して歪んだもの、焼成不良で摩耗、風化しているもの、一部焼成不良のものなど完形となるものがない。そのため焼成不良土器の廃棄場所とも考えられるが、遺構などを伴っておらず、断定はできない。壺や壺の形態は佐土原町下村窯跡群出土のものと形態が類似している。これらより平安時代を中心とする時期が想定される。

2 遺構について

土師器が散見されたところに炭化物を伴う焼土が確認されたが、遺構が検出されず、焼土と遺物の関連は明らかにできなかった。畝状遺構、溝状遺構、竪穴状遺構がそれぞれ一基と柱穴の突端部分が確認された。柱穴の突端部分は第IV a層上では検出できておらず、第IV b層上面で柱穴の突端部を3つほど確認した。しかし、掘建柱建物跡としては確認できていない。どの遺構も共判する遺物がないために時期決定の判断が難しい。

<参考文献>

【余り田遺跡 一般国道10号宮崎西バイパス建設事業に伴う発掘調査報告書】1997 宮崎県埋蔵文化財センター
【下村窯跡群報告書<基礎資料編>】1996 佐土原町教育委員会



大辻屋敷遺跡遠景



大辻屋敷遺跡近景



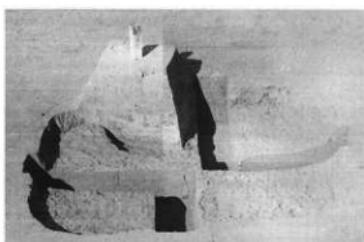
嵌状造構



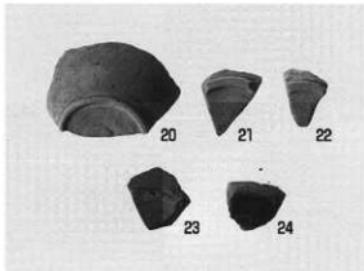
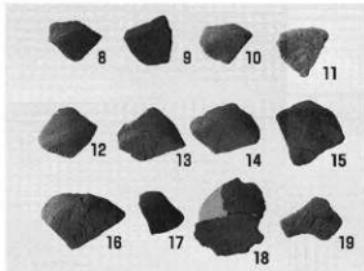
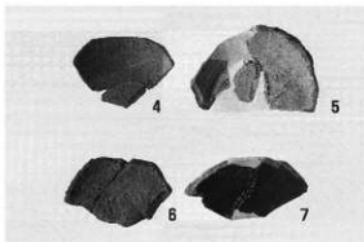
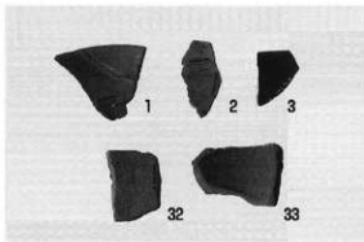
溝状造構

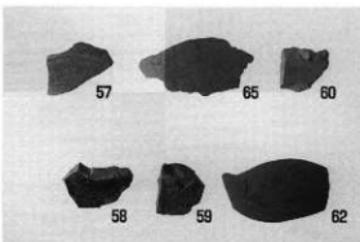
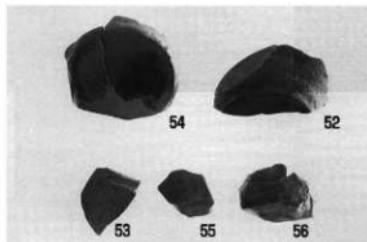
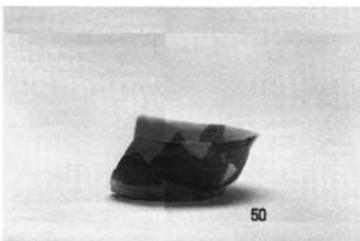
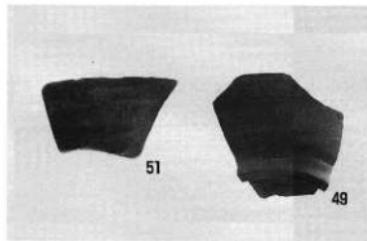
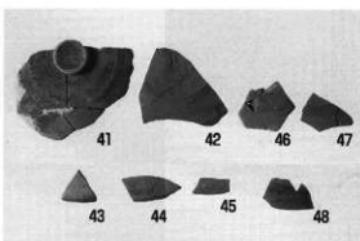
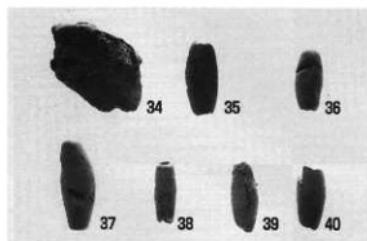
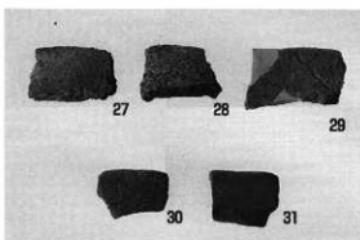
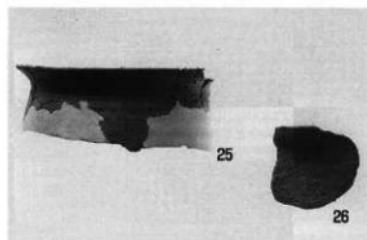


土器集中箇所



竪穴状造構



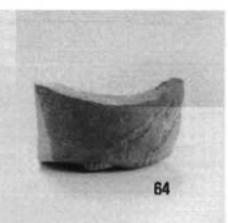




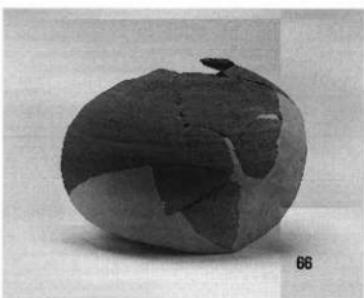
61



63



64



66



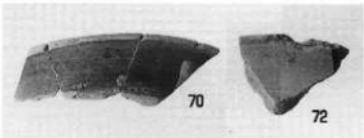
67



69

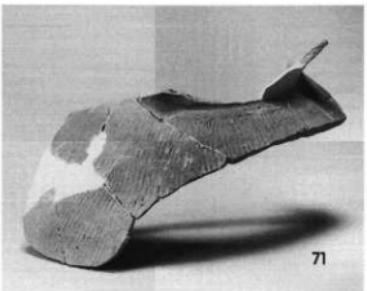


68

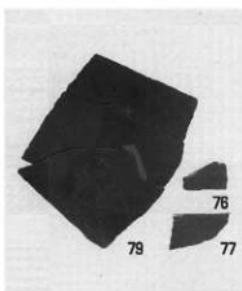
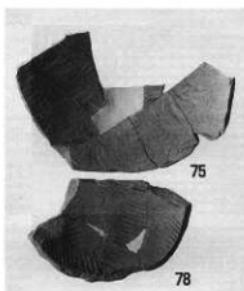
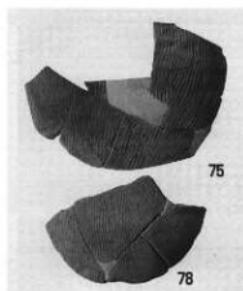
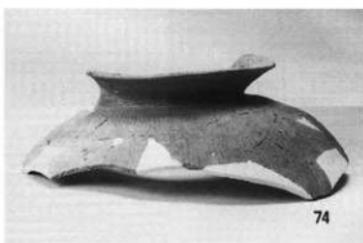
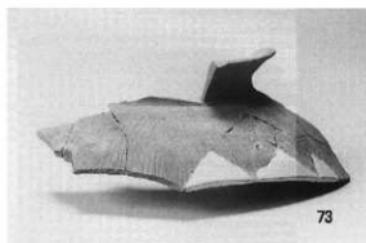


70

72

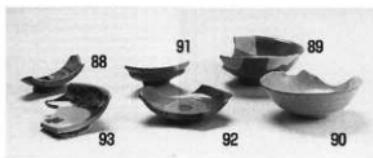
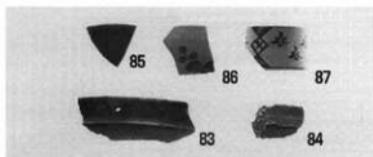
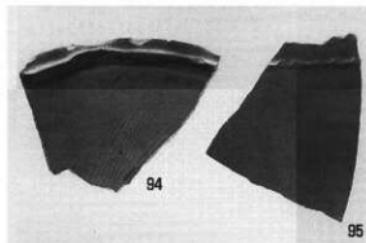
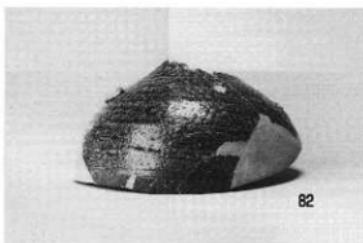
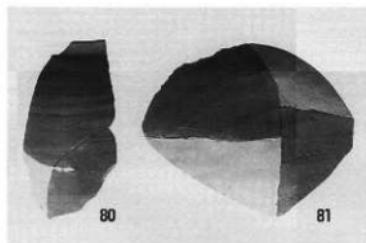


71



表

裏



報告書抄録

フリガナ	ウメガシマイセキ オオツジヤシキイセキ					
書名	梅ヶ島遺跡 大辻屋敷遺跡					
副書名	東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第32集					
編集者名	福松東一					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地					
発行年月日	2001年3月					
フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所 在 地	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
梅ヶ島遺跡	宮崎郡佐土原町西上那珂字梅ヶ島 4872-1, 3, 4, 5 4873-1, 2, 4874-1 5197-2, 5198, 5199	32°01'44" 付近	131°23'30" 付近	1997. 8. 1 1997.12.15	1,072m ²	道路建設
種別	主な時代	主な遺跡		主な遺構		特記事項
水田遺構	古代～中世	土師器 布痕土器 陶磁器		畦畔		
フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所 在 地	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
大辻屋敷	西都市大字黒生野字大辻屋敷 1587-1, 2, 3 1582-6, 10 1586, 1581-2 1579-3	32°03'55" 付近	131°24'43" 付近	(一次) 1998. 9.16 1998.11.24 (二次) 1999. 2. 8 1999. 2.21	600m ² 100m ²	道路建設
種別	主な時代	主な遺跡		主な遺構		特記事項
散布地	古代～中世	須恵器 土師器 陶磁器		鉢状遺構 溝状遺構		土器集中箇所

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第32集

**梅ヶ島遺跡
大辻屋敷遺跡**

発行年月日 平成13年3月

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL0985-36-1171 FAX0985-72-0600

印刷機微印刷センタークロダ

〒880-0222 宮崎市大橋2丁目175
TEL0985-24-4351 FAX0985-27-9337
